

2010年度 福島県「大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業」実証実験報告書

やまぶにゅう 山舟生地区活動報告



2011年3月

東北大学公共政策大学院α

目次

はじめに.....	1
1. 山舟生地区概要	2
(1) 人口・高齢化率.....	3
(2) 特産品・行事.....	4
2. 2009 年度の活動概要とその後の動き	7
(1) 2009 年度活動概要.....	7
(2) 活動の限界とその後の動き.....	19
3. 2010 年度活動概要	21
(1) 再考察.....	21
(2) 2010 年度公共αの活動.....	35
(3) 活動報告.....	37
4. 2年間の活動を踏まえて	45
(1) 山舟生地区について.....	45
(2) 福島事業に対して.....	52
②地域住民の認識と学生の意識について.....	53
おわりに.....	59

はじめに

我々東北大学公共政策大学院 α （以下、「公共 α 」と略）は、2009年度福島県がおこなった「大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業」（以下、「福島事業」と略）に参加した東北大学公共政策大学院ワークショップIプロジェクトA（以下、「WSA」と略）を発展させたものである。2009年度はWSAのメンバー8名で活動をし、2010年度はWSAのメンバーから引き続き5名が活動に参加し、新たに5名の学生を加え計10名の学生で山舟生地区に入った。

本報告書は山舟生地区の住民の方々と交流の記録であると共に、学生が考える福島事業の今後、地域の今後についての考察を記したものである。



1. 山舟生地区概要

まず、福島県伊達市梁川町山舟生（やまふにゅう）地区（以下、「山舟生地区」と略）の概要について述べる。

山舟生地区のある伊達市は、福島県の北部に位置し（図1参照）、県都福島市に隣接している市である¹。伊達市は2006年、伊達郡の伊達町、梁川町、保原町、霊山町、月舘町が合併して誕生した。山舟生地区は旧梁川町内の集落であり、宮城県との県境に位置している。人口は992人（2010年10月）、高齢化率は30.9%（2010年10月）で、旧梁川町の中心部からは約7km離れた中山間地域である（図2参照）。山舟生地区内は12の町内会に分かれている。

図1 伊達市、旧梁川町の位置

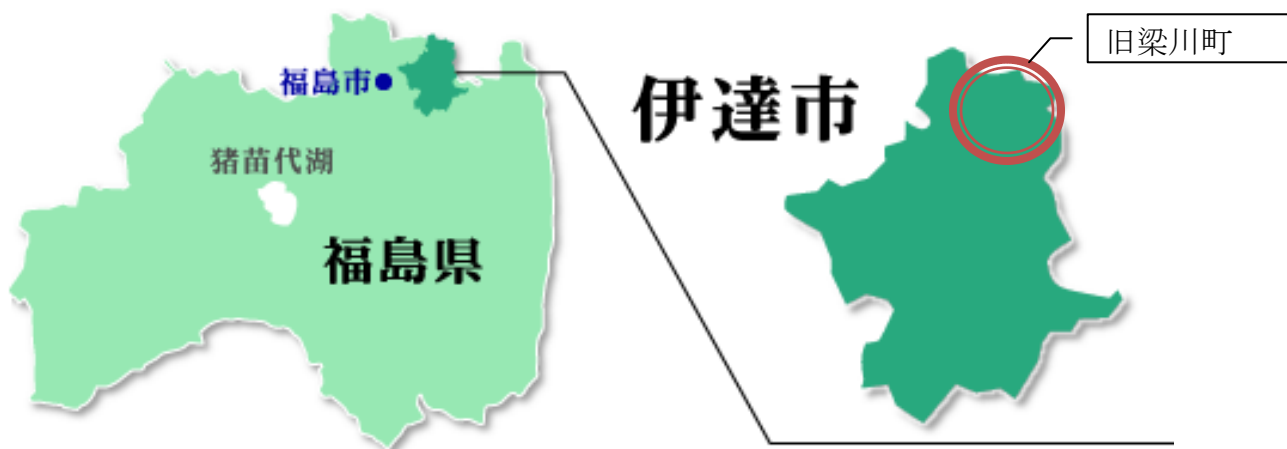


図2 山舟生地区の位置

出典：伊達市ホームページ



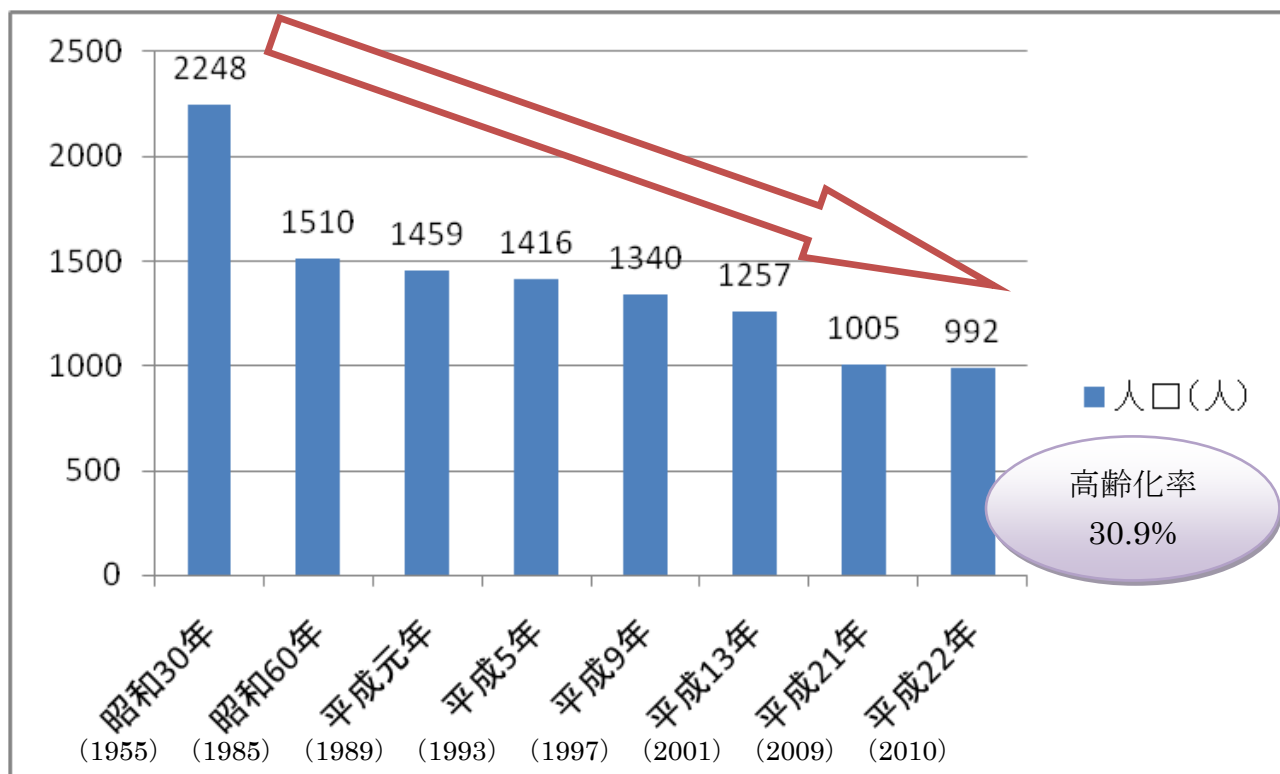
出典：梁川町「やながわ 50 年の軌跡」152 頁

¹ 伊達市の概要については、伊達市ホームページ (<http://www.city.date.fukushima.jp/index.html>) を参照した。（最終閲覧日 2010 年 3 月 10 日）

(1) 人口・高齢化率

まず、山舟生地区の現状を人口推移からみていく。図 18 は昭和 30 (1955) 年から平成 22 (2010) 年までの人口推移を表したグラフである。山舟生地区は昭和 30 年頃、つまり約 50 年前と比べると人口が約半分にまで減少している。また、高齢化率は 30.9% で、福島県の平均を上回っている²。このグラフから、山舟生地区では人口減少、少子・高齢化が進行していることが伺える。

図 3 山舟生地区の人口推移



² 福島県の高齢化率の平均は 24.9% であり、全国平均は 23.1% である (いずれも、2010 年 9 月 1 日現在のデータを参照した)。

(2) 特産品・行事

山舟生地区の特産品には羽山そば、羽山漬け、あんぼ柿などがある。あんぼ柿とは、皮をむいて硫黄で薫蒸した柿を1カ月ほど寒風にさらして乾燥させたものである。あんぼ柿は大正時代、梁川町の農家が平核無（ひらたねなし）や蜂屋などの渋柿を使い、全国で初めて硫黄薫蒸して作ったのが始まりで、名前の由来は、天日で乾燥させる天干し柿（あまぼしがき）が転じたと言われる³（図4参照）。冬になると、山舟生地区のほとんどの農家の軒先にあんぼ柿が吊るされている。

図4 あんぼ柿



また、毎年行われているイベントには、4月に開催される「羽山神社の山開き」や7月に開催される「山舟生くぼたアジサイ祭り」、11月に開催される「山舟生羽山神社の山車祭り」などがある。山舟生地区には約1万株のあじさいが植えられている。山舟生地区全体をアジサイ一色にしようと、住民が協力しながら公園や地区内の道路沿い、田んぼのあぜ道などにアジサイを植えている。最終的には25,000株のアジサイを植え、ギネスブックへの認定を目標に活動を続けている。「山舟生くぼたアジサイ祭り」では、アジサイだけではなく「ペットボタル」という手作りのイルミネーションを楽しむことができる（図4参照）。「ペットボタル」とは、ペットボトルをくり抜き、その中にろうそくを灯すもので、地元住民のアイデアから始まった。この時期の山舟生地区は、ペットボタルによって幻想的な雰囲気包まれる。

³ 参照、河北新報記事（2007年11月23日）

また、「羽山神社の山車祭り」では、人形や花で装飾した7台の山車が地区内を練り歩く（図5参照）。山車祭りでは太鼓や獅子舞などの郷土芸能も披露される。この祭りは300年以上の長い歴史を持っており、無形民俗文化財に指定されているだけでなく、「うつくしま祭り50選」にも選ばれている。

山舟生地区に古くから伝わる郷土芸能には羽山太鼓、除石観音獅子舞、西部笠踊り、山舟生萬才などがある。

図5 「山舟生くぼたアジサイ祭り」の様子



図6 「羽山神社の山車祭り」の様子



さらに、山舟生地区では和紙づくりも行われている。山舟生和紙がいつ頃から漉かれていたか定かではないが、言い伝えによると、文治以前、既に漉いていたとも、大阪の役の落人が教えたとも言われているそうだが⁴。山舟生和紙は和紙需要の激減と和紙生産者の減少によって、1980年頃に一度途絶えてしまった。しかし、長い歴史とともに受け継がれてきた紙漉き技術と業が消滅してしまうことは残念なことだという地域住民の声により、1995年、山舟生和紙を復活させた。山舟生和紙は、時代に即した用途別和紙製品づくりを目指し、研究を重ねている。現在は冬季限定で紙漉きを行い、山舟生小学校の卒業証書用紙を作るなどしている（図7参照）。

図7 和紙づくり



多くのイベントを開催している山舟生地区であるが、これらのイベントの多くは「山舟生地区明るく住みよいむらづくり推進協議会（以下、「むらづくり協議会」と略）」が主催している。むらづくり協議会は、山舟生地区を元気のある誰もが住みたくするような地域にしたいとの思いから1982年に設立された。山舟生地区の全世帯がむらづくり協議会会員であり、地域が一丸となってよりよい山舟生地区づくりを目指している。

その他にも、山舟生地区には美しい田園風景が広がっており、きれいな川や、きれいな水も魅力の一つである。「山舟生」という地名は「山」と「舟」という、一見あまり関係のなさそうな単語が使われている。この地名の由来は山舟生の七不思議にもなっている。山舟生七不思議の4つ目である「四に、新田小舟の堰」によると、昔、八幡太郎源義家が奥州征伐の際、突然神船が現われて敵軍を打ち破り、大勝利を収めることができた⁵とされている。この伝説により、「山より船、生まれ出たる」をもつ

⁴ 山舟生和紙の記述に関しては、全国手すき和紙連合会ホームページ (<http://www.tesukiwashi.jp/p/yamafunyu1.htm>) を参照した。（最終閲覧日 2010年3月10日）

⁵ 山舟生地区明るく住みよいむらづくり推進協議会「伝統を継承するふるさと山舟生」

て山舟生と名付けたという説もあるそうだ。山舟生地区は美しい自然に囲まれているだけではなく、古くからの歴史を持った伝統ある集落である。

2. 2009 年度の活動概要とその後の動き

(1) 2009 年度活動概要

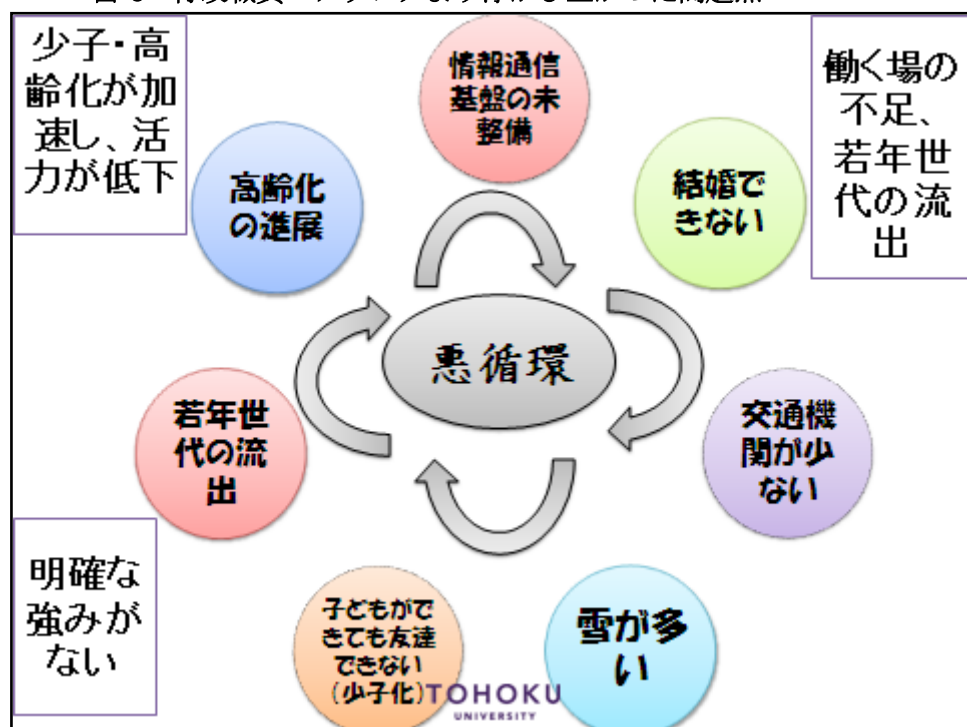
2009 年度、WSA は山舟生地区に事前調査、事前視察、意見交換会、祭りへの参加、報告会と、計 5 度入り、調査をおこなった。調査は、山舟生地区の住民の方々の視点、行政職員の視点、そして学生という外部の視点という 3 つの視点から山舟生地区を見直し、山舟生地区の抱える問題点や課題を洗い出すことを目的として進めていった。具体的には①集落代表者と行政職員へのヒアリング②山舟生地区住民の方々との意見交換会③学生が考える山舟生地区活性化案の作成の 3 つの活動をおこなった。

①問題状況

i) 行政職員・集落代表者ヒアリング

行政職員のヒアリングから浮かび上がった問題点について述べる。伊達市の職員は、山舟生地区、ひいては梁川地域の問題として、少子化・高齢化が加速して活力が低下していること、働く場の不足やミスマッチによって、若年世代が他地域へ流出していることを挙げている。また、地理的な特性から、伊達市は明確な強みがなく、それゆえに地域産業が育ちづらいとも指摘している。これらの問題は、図 19 にあるような、携帯が繋がらない（情報通信基盤の未整備）や交通機関が少ないといった様々な要素が悪循環を引き起こしていることが、問題の深刻度を増しているとも指摘している。

図 8 行政職員ヒアリングより浮かび上がった問題点



ii) 意見交換会（2009年10月10日、11日）

事前準備、事前視察を経て、2009年10月10日、11日には山舟生地区林業構造改善センターで意見交換会を開き、山舟生地区の住民の方々と学生が一緒になって、山舟生地区について考えた。1日目の意見交換会では、山舟生地区の住民の方々約50名の方にお集まりいただいた。2日目には、集落の代表者の方々と学生で1日目の意見交換会で出た内容をさらに深めるという形で意見交換会を行った。

意見交換会では、事前視察・事前調査をもとに学生が作成した山舟生地区現況マップを参考に、①山舟生地区のよいところや悪いところ、困っているところを挙げてもらった。山舟生地区の現状を確認したうえで、次に、このままにしていたら②10年後の山舟生地区はどうか、10年後の山舟生地区のよいところや悪いところ、困っているであろうことについて意見を挙げてもらった。山舟生地区の現状と将来を踏まえた上で、③山舟生地区を今後どのような地区にしていきたいかという、夢ビジョンを挙げてもらった。夢ビジョンとして挙げた意見は、WSAで1枚の地図に集約し、夢マップを作成した。

意見交換会では、事前調査や事前視察では発見できなかった山舟生地区のよいところを教えていただいた。また、住民の困っていることを深く知ることもできた。さらに、山舟生地区をもっと元気にするためのアイデアも教えていただいた。

図9 意見交換会概要

【話し合うテーマ】

- ① 山舟生地区のよいところ・悪いところ、困っているところ
- ② 10年後の山舟生地区（よいところ・悪いところ、困っているところ）
- ③ 山舟生地区をどのような地区にしたいか（夢ビジョン）



夢ビジョンで出た意見を1枚の地図（夢マップ）にする

意見交換会では、現在の山舟生地区のよいところとして、人に活気や熱意があるところや、美しい自然、豊富な地域資源等が挙げられた。反対に、悪いところ、困っているところとしては老人の一人暮らし世帯、二人暮らし世帯の増加や郷土芸能の存続が困難な点等、人口減少・少子高齢化によって引き起こされている様々な問題が挙げられた。また、10年後の山舟生地区のよいところとしては、山舟生地区の伝統である和紙づくりや紙漉きは続いているだろう、また、住民が協力して植えているアジサイや三春町からもらった滝桜は成長し、咲き誇っているだろうという意見が挙げられた。一方、10年後の山舟生地区の悪いところ、困っているであろう点については、人口のさらなる減少、それに伴う小学校統合の恐れ、既存の行事が盛り上がらなくなるといった意見が挙げられた。これらの意見は、現在の山舟生地区で抱えている問題点の深刻度が増すだろうという厳しいものであった。

②WSA が考えた山舟生地区の課題

ヒアリングや意見交換会の中から浮かび上がってきた問題から、WSA は、山舟生地区には大きく3つの課題があると考えた。

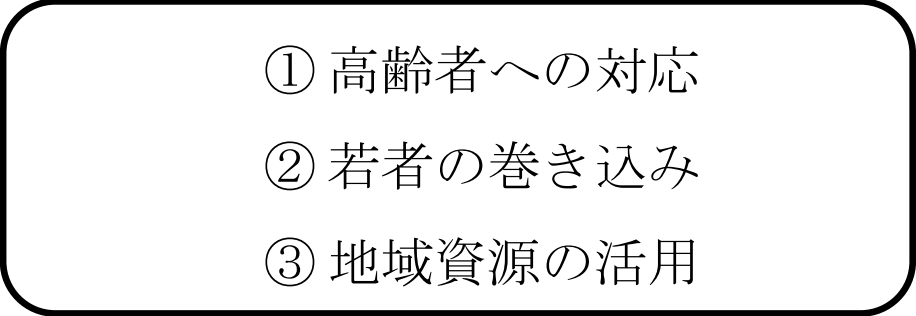
まず1つ目は、高齢者への対応である。(1) 山舟生地区の人口推移でみたように、今後も山舟生地区では人口減少、少子高齢化が進むと考えられる。今後増加するであろう高齢者の方々を地域でどのように支えていくかという視点がさらに重要となってくる。

2つ目は、若者の巻き込みである。山舟生地区は、高齢化率30.8%とはいえ、多くの若者がいる。実際、WSA が参加させていただいた祭りでも、20代~30代の若者が多くいると感じた。しかし、多くの若者が「地域デビュー」できておらず、地区の行事に参加できていないという現状がある。

3つ目は、地域資源の活用である。2. 山舟生地区概要で述べたように、山舟生地区には豊富な地域資源があり、多くのイベントが開催されている。しかし、イベントを行っても観光客がお金を落とすような経済循環がないため、イベント開催ごとに地域の負担が増えてしまっている。

これらの課題を解決していくことが、山舟生地区の将来を考えるにあたって必要となる。

図 10 WSA が考えた山舟生地区の課題

- 
- ① 高齢者への対応
 - ② 若者の巻き込み
 - ③ 地域資源の活用

③山舟生地区活性化案

i) 山舟生地区への提案概要

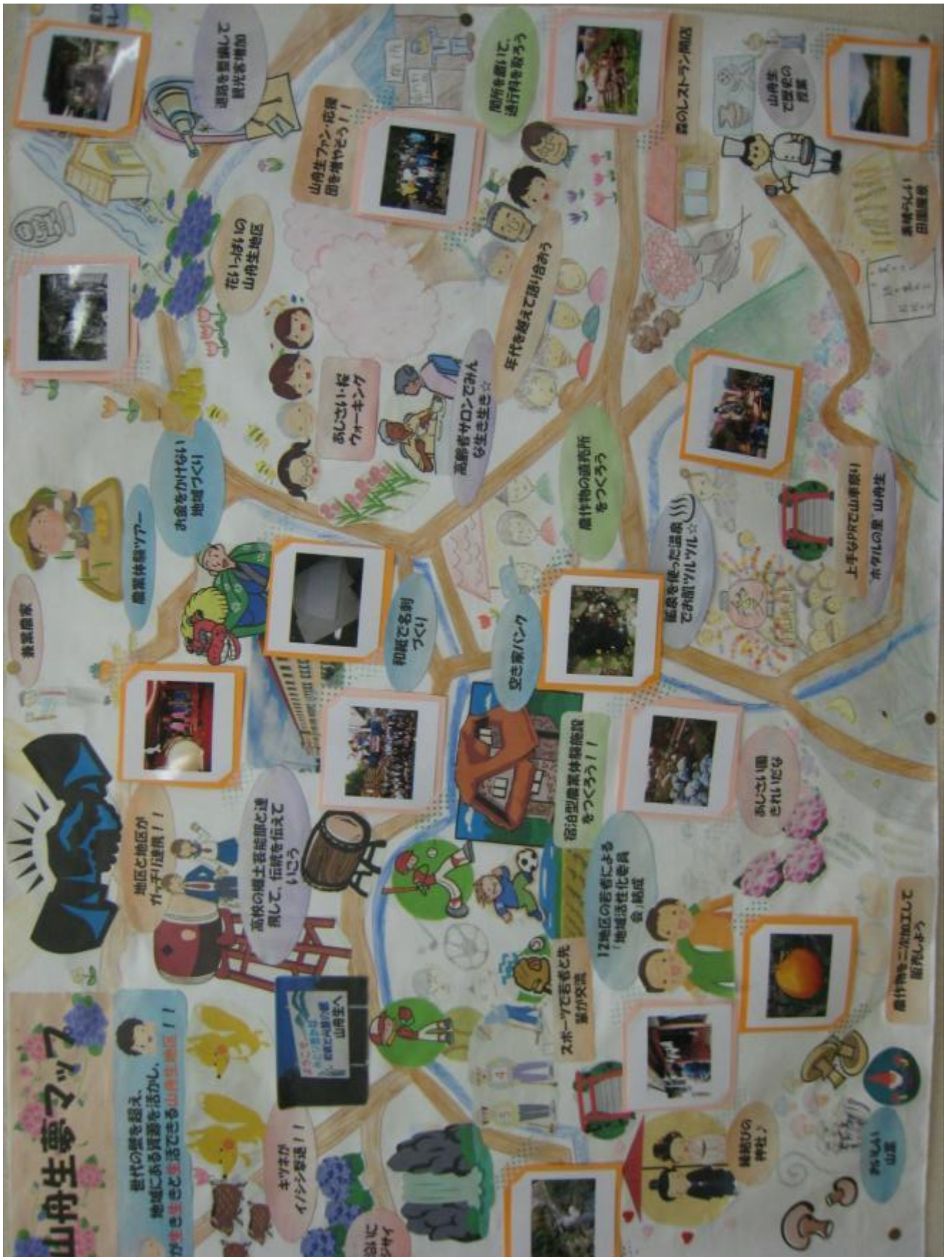
前述した問題意識から、WSA は、山舟生地区の課題の解決に少しでも貢献するような活性化案はないかと考えるようになった。そこで、意見交換会の中で住民の方々と学生で考えた夢ビジョンを参考に、活性化案を考えた。図 11 が山舟生地区夢ビジョンの一部である。「今後山舟生地区をどのような地区にしたいか」というテーマに対して、住民の方からは和紙を生かしたい、高齢者を繋ぐ役割の人をつくりたい、地区同士の連携を強めたい、祭りを活性化させたい、年代を越えて語り合いたいなど、多くの夢ビジョンが挙げられた。夢ビジョンの内容を地図にしたものが、図 12 の山舟生地区夢マップである。このように、住民の方々からは多くの夢や希望が挙げられた。

図 11 山舟生地区夢ビジョン (一部)

- ・ 和紙を活かしたい！！
- ・ 高齢者を繋ぐ役割の人をつくりたい！！
- ・ 地区同士の連携を強めたい！！
- ・ 祭りを活性化させたい！！
- ・ 年代を越えて語り合いたい！！
- ・ 宿泊型農業体験施設をつくりたい！！

・・・など

図 12 山舟生地区夢マップ



WSA はまず、夢マップを現実のものとし、山舟生地区の課題を解決するための「山舟生ビジョン」を設定した。そのビジョンとは、「世代の壁を越え、皆が生き生きと生活できる山舟生地区！！」である。

「世代の壁を越える」とは、山舟生地区内の横の繋がりや縦の繋がりを醸成することを意味する。また、「皆が生き生きと生活」とは、地域資源を活かすことによって観光客等からお金を落としてもらうための仕組みをつくり、小さな経済循環を起こそうという意味が込められている。この山舟生ビジョンを達成すると、山舟生地区はもっともっと元気な地区になると、WSA は考えた。

図 13 夢マップ実現のための山舟生ビジョン



**世代の壁を越え、
皆が生き生きと生活できる
山舟生地区！！**

そして、この山舟生ビジョン実現のために、WSA は大きく 4 つに分けて活性化案を考えた。①郷土芸能のさらなる成長、発展 ②既存の高齢者サロンを拡大させた、新たなサロンづくり ③地区内外の若者の若い力で山舟生を活性化 ④地域資源の活用 の 4 つである。

活性化案の効果としては以下の点を考えた。まず、他地域の交流という観点からは、山舟生のファンや応援団が増え、既存のイベントの参加者、観光客の増加が期待される。そして、イベントの活気が増し、お金を落とす経済循環も生まれ、ゆくゆくは山舟生のファンの中から山舟生地区への定住者が出てくるという良いサイクルが生まれるのではないかと考えた。また、山舟生地区内を見てみると、今まで以上に世代間交流が活発となることが期待される。そうすると、山舟生地区は今まで以上に活気のある地区にあることができると、WSA は考える。

また、活性化案の実効性を高めるために、「5ヶ年計画の策定」を提案した。活性化案の実現のためには、単年度ごとに計画を立てるのではなく、長期の見通しを立て、計画的なまちづくり運営を行うことが必要である。長期の見通しを立てた上で、1年ごとに住民の方々と話し合い、その都度計画の見直しと修正を行っていくと、よりよいまちづくり運営ができるのではないだろうか。実際に、山口県周南市鹿野渋川地区⁶や、新潟県長岡市小国町法末地区⁷では、集落計画を策定することで、まちづくり運営がより活発になっている。WSAは5ヶ年計画の策定を提案するにあたり、例として各活性化案に関する5ヶ年計画を策定し、山舟生地区の方々にお渡しした。

⁶ 参照、現代農業 2008 年 11 月増刊『集落支援ハンドブック』（農文協、2008 年）86～95 頁

⁷ 参照、岡田知弘・にいがた自治体研究所編『山村集落再生の可能性』（自治体研究社、2007 年）72～88 頁

ii) 活性化案詳細

2009 年度提案した活性化案の詳細は以下のとおりである。

図 14 WSA が提案した活性化案

a) 郷土芸能の成長、発展

(出張太鼓／郷土芸能姉妹都市連携／部活との連携／芸能部の創設)

b) 高齢者サロンづくり

(共同住宅内でのサロン／若者との交流サロン／郷土芸能サロン／
子どもとの交流サロン)

c) 若い力で山舟生を活性化

(若者主体の新たな組織づくり／若者主体での温泉付き民泊施設づ
くり／若者による郷土芸能の継承／地域外部の若者の呼び込み)

d) 地域資源の活用

(あじさいウォーキング、あじさいマラソン／フランド和紙名刺づく
り／和紙づくり体験／森のレストラン／イノシシのコンビニ弁当／
あんぽ柿のスイーツ／“ホタルの里”山舟生)

a) 郷土芸能の成長、発展

山舟生地区には羽山太鼓、除石観音獅子舞、西部笠踊り、山舟生萬才といった多くの郷土芸能が存在する。その他にも毎年7月に行われる久保田あじさい祭り、毎年11月におこなわれる羽山神社秋季山車祭といった伝統的な祭りもある。あじさい祭りは、ホテルに見立てたライトアップ（ペットボタル）を行うなどの工夫を凝らした地域の手作りイベントである。山車祭は300年以上の歴史を持っており、伊達市の無形民俗文化財、うつくしま祭り50選にも指定されている。これらの郷土芸能や祭りは世代から世代へと受け継がれ、今に至っている。しかし現在、山舟生地区では人口減少、少子高齢化の影響に伴い郷土芸能の担い手不足といった問題が浮かび上がっている。また、祭りについても財政難により行政からの助成がなくなってしまい⁸、その運営が難しくなっている。意見交換会においても、「郷土芸能の存続が危ぶまれている。」「10年後には祭は続いていないだろう。」「10年後は山車の維持ができなくなるだろう」「（祭会場が）昔は人で埋めつくされていたのに、今はお客もまばらになってしまった。」「山車をつくるにも若者が少なくて大変だった。」といった声が挙がった。

山舟生地区にとって祭や郷土芸能を存続させ、さらに成長・発展させていくことは、住民がこれからも山舟生地区で生き生きと生活するために必要不可欠である。郷土芸能の担い手不足を解消するためには絶対的な人員が必要となる。しかしながら、今すぐに山舟生地区の人口を増やすことは困難である。そこで我々は、まずは交流人口を増やすことが必要であると考えた。他地域との交流によって山舟生地区の郷土芸能ファンや応援団を育成するための案を4点提示した。

1点目が、「出張太鼓」である。出張太鼓は、山舟生地区の伝統的な郷土芸能である羽山太鼓を外に向けて発信するために、各地に出張して太鼓演奏を披露するという案である。出張太鼓の主な担い手は小学生と卒業生といった若者を中心としている。若者にとっては幼い頃から郷土芸能に触れる機会が増え、将来的に郷土芸能の担い手になることが期待されるし、外の地域の同年代の若者との交流もできる。また、若者に交じって年配の方も出張太鼓に参加するようになることで、出張太鼓が外部との交流の場になるだけでなく、内部での世代間交流の場となることも期待される。

2点目は、「郷土芸能姉妹都市提携」である。郷土芸能姉妹都市提携は、山舟生地区のように山車祭を開催している地域と「姉妹都市」提携を結び、お互いの地域を訪問しあうことで交流人口を増やしていくという案である。山舟生地区の山車は、2009年8月1日におこなわれた「ふくしま山車フェスタ」に参加した際、山車の完成度の高さが多くの注目を集めたそうである。姉妹都市提携を結ぶことで山舟生地区の山車を他地域に発信することができ、そこから山舟生地区に興味を持つ人が増えることによってあじさい祭や山車祭への来客数が増加することも期待される。また、他地域の郷土芸能に触れることで自分の地域の郷土芸能のよさを再発見することも期待される。

3点目は「部活との連携」である。部活との連携とは、伊達市内や福島県内にある高校、大学の部活に協力を求め、郷土芸能部を創設してもらうことで山舟生地区の郷土芸能を学んでもらおうという、外部の若者との交流案である。とくに高校の部活と連携することは、全国規模の大会（全国高等学校総合文化祭）が行われていることもあり、創設後は活発な交流が期待される。また、ちょうど2011年度の全国高等学校総合文化祭の開催地は福島県であるので、2009年4月には福島県に全国高等学校総合文化祭推進室が設置された。行政側にとっても各地で高校生が郷土芸能部を創設するとなれば全国大会の成功に

⁸ 参照、2008年伊達市ふれあい懇談会発言録

も繋がっていくことができる。この案は、住民の側は郷土芸能を教える指導者として郷土芸能の発展に関わることができ、また、高校生は全国大会出場という目標を目指して練習できるので高いモチベーションが生まれることが期待できる。住民、高校生の両者にとって大きなメリットがあり、行政との連携も視野に入れて考えることができる案である。

4点目は、「芸能部の創設」である。この案は山舟生地区内に芸能部と称する集まりを設け、高齢者が郷土芸能を練習したり披露する機会を設けることによって生きがいをつくることで郷土芸能の伝承につなげようとする案である。この案は高齢者サロンの設置とともに進めることが期待される。住民の方が集まる機会を利用して郷土芸能を練習することで横のつながりが醸成し、いずれは若者や他地域の参加者を呼び込むことで世代間交流、他地域との交流が期待される。

b) 高齢者サロンづくり

山舟生地区は人口が2248人（1955年）から1016人（2009年）と50年で約半数に減少し、高齢化率は30.8%（2009年）と増加している。このように人口減少、高齢化が進む山舟生地区では高齢世帯が増え、老人1人世帯、老人2人世帯が増加しつつある。これからの山舟生地区がさらに元気な集落となるためには、人生の先輩である高齢者の方々がこれからも元気に生き生きと生活できる環境を整えることが求められる。意見交換会においても、「老人の1人暮らし2人暮らしの増加で高齢者が大変。」「介護の問題が大変になってくる。」「高齢者はデマンドタクシーなどのサービスの利用方法を知らず、教えてくれる人も周りにいない。」「（10年後は）子どもの数はますます減少し、高齢化が進行する。」といった声が挙がった。

山舟生地区では1962年に設立された「長生会」という老人会があるが、それだけでは高齢者への対応が不十分である。今後さらに高齢者が増えることを考えると、高齢者が安心して生き生きと生活していくことのできる環境を整え、また、高齢者同士のつながりを築き、安心して生活を送ることができることが必要である。

現在、山舟生地区にはサロンが2箇所設置されており、高齢者の方々が集まってお茶を飲んだりお話をしている。意見交換会2日目において、集落代表者の方々からは「サロンの場所を増やしたい」という意見が聞かれた。そこで我々は、高齢者のためのサロンづくりに際しての4つの案を提示した。

1点目は、「共同住宅内のサロン」設置である。この案は意見交換会で出された「高齢者が安心して住めるような共同住宅を設置したい」という夢ビジョンに対応するサロンである。高齢者が居住する共同住宅内にサロンを設置し、入居者の憩いの場とする。

2点目は「若者との交流サロン」設置である。この案は高齢者と若者の交流を図るサロンである。サロンの設置場所は農協の一角や公民館、分館、空き家を想定している。まずは月に2回ほど高齢者で集まる機会を設け、集まりの習慣をつけていく。その後集まる頻度を増やし、集まってお茶を飲むだけでなくお茶菓子や郷土料理を一緒につくるなどの作業にチャレンジしてみる。その後、若者も巻き込んで昔ながらの郷土料理を若者に伝えたり、反対に若者から今どきの料理を教わったりする場とする。高齢者も若者も、お互いが教える立場、教わる立場となり、世代を越えた交流を楽しむことができる。

3点目は、「郷土芸能サロン」の設置である。この案はサロンで郷土芸能をたしなむというものである。サロンの設置場所は農協の一角や公民館、分館、空き家を想定している。サロン内に芸能部と称する集まりを設け、高齢者が郷土芸能を練習し、披露する機会を設けることによって高齢者の生きがいをつくることを目的としている。この案は郷土芸能の成長・発展にも寄与することが期待される。住民の方が集まる機会を利用して郷土芸能を練習することで横のつながりが醸成し、さらには若者や他地域の参加者を呼び込むことで世代間交流、他地域との交流が期待される。

4点目は、「子どもとの交流サロン」設置である。この案は高齢者と子どもの交流場となるサロンを設置するという案である。山舟生小学校内にある空き教室をランチルームに改良し、高齢者と小学生が給食を食べながら交流をし、高齢者が教える側となって「総合的な学習の時間」の際に山舟生の歴史や文化を小学生に伝承する。また、サロンに高齢者がいることで放課後の時間は放課後児童クラブのような役割を成し、高齢者と小学生で昔ながらの遊びに親しんだりもすることができる。

c) 若い力で山舟生を活性化

現在、過疎化が進行した地域ではお年寄りが多くなり、年齢構造がアンバランスになっているという傾向が共通してみられる。それらの地域では、高齢者が多くなることで各々の集落で行われてきた自治会やその他集まり、また、集落内の祭りや趣味の集まりなどの維持運営が難しくなっていき、次第に開催頻度が減少していくことにつながる。実際、多くの集落が「自治会などが運営できない」、「祭りが維持できない」といった問題を挙げている。この山舟生地区でも、伝統の山車祭りが数年間中止に追い込まれた時期があったことは記憶に新しい。

そのため、過疎集落対策として地域内の若い担い手を巻き込んでいく取組みは、重要な緊急課題としてその必要性が広く叫ばれている。また、地域外の若者をいかに地域内に取り込んでいけるかということも地域の自立や活性化の面から強化していくべき課題として重要となってきた。

そのような中、山舟生地区では過疎化が進行し高齢化率も高くなってはいるものの、まだ地区内に若者がある程度残っている状況にある。若者中心の消防団も組織されており、らっぱ隊も新たにできるなど一定のまとまりを持った活動が見られる。さらに、今年10月に開催された意見交換会には山舟生に住む若い方々も数名参加してくれるなど、若者が地域の活動に関わっていこうとする姿勢がみられ、今後の山舟生の担い手としての活躍が期待されている。

しかしその一方、意見交換会では高齢者の方々から、「山舟生の若者は自らの仕事に忙しいのか、地域デビューできていない」などの声も聞かれ、若者が地区内で存在感を発揮する機会が不十分である現状もみえてきた。意見交換会内では、各住民の方々からの思い思いの意見から、その背景をうかがい知ることもできた。今回私たちは、今後の山舟生の担い手として期待される若者の力が地域内で発揮されていないという点を解決すべき重要な問題ととらえ、4つの案を提案した。

1点目は、「若者主体の新たな組織づくり」である。この案は、地区内の若者が主体となって新たな組織を設けるという案である。消防団などの既存の組織から新しく作ってもいい。「若者・地域活性化委員会」などの名称で組織を新しくつくる。その組織の作り方は、消防団長や若者の中心的な人物でも若者とネットワークを持っている人間が行うといいかもしれない。その人が、地区の若者に少しずつ声を

かけていって、少しずつ若者の間で地域の問題を解決していく雰囲気を作っていく。たとえば、朝ソフトをやる中で、地区の問題や地区の将来を話す機会を持ってもいい。地区の中で、ある程度地区の将来に関して話し合いができるような人数が揃ったら、新たな組織をつくる。そして、少しずつそのネットワークを大きくしていくことが望ましい。

2点目は、「若者主体での温泉付き民泊施設づくり」である。この案は、山舟生地区に温泉の源泉である鉱泉があることからでた案であるが、簡易な足湯程度でもそのような施設をつくることによって、山舟生に立ち止まってもらうことを期待する案である。この案の良い点としては、この活動がそのまま地域の活性化につながるという点である。簡易でも温泉施設が作られることによって、あじさい祭りを見に来たお客さんが一息つける場所になれば、話題性も上がる。若者が主体で、温泉を活用した活性化案を具体化できたら、一つの成功事例として、今後も活性化策を進めやすくなると予想できる。

3点目は、「若者による郷土芸能の継承」である。この案は、既存のイベントにて行われている郷土芸能を若者が担っていくというものである。山車祭りや羽山太鼓がある。仰々しいお祭りは全国各地である。しかし、それは地域の歴史と密着しているからこそ、いいのである。地域の伝統を若者が担っていくということは、地域の歴史を若者が作っていくことに他ならないため、若者が郷土芸能を引き継ぐことにはとても意義がある。具体的には、お祭りに参加してもらうことである。また、若者組織の中で、伝統を絶やさないといい共通認識をつくっていくことが大事である。

4点目は、地域外部の若者の呼び込みである。山舟生地区には、様々なイベントがある。しかし、これらのイベントは、長年同じような固定化したイベントであり、なかなか新しいことがなされていない。そこで、既存のイベントに若者のアイデアを生かした取り組みを採用し、外からも若者が参加できるようなイベントにする。これは伝統を重んじつつ、革新を進めていくというものである。地区の将来は、若者が担っている。その若者が、お祭りをより良くしていこうと取り組むことで、イベントにも活気が出てくると考える。

d) 地域資源の活用

地域資源の活用をもって地域の活性化を行うことは、住民の郷土愛の醸成や地域外のファン層の拡大、雇用創出による地域経済の活性化などの効能があり、大変有益である。幸いにも山舟生地区には、数多くの活用可能な地域資源が存在しており、地域資源の活用を図るかたちでの地域活性化策を実現することが可能な状況にある。しかしながら、現状では地域資源が“素材”のまま散らばっているために、地域活性化に十分に活用できておらず、また地域資源が“素材”のまま散らばっているために、今後の活性化策も見え辛いという現状がある。そこで、活用可能な地域資源を整理し、地域資源の競争力の向上を図る取り組みを行うことで、“素材”としての地域資源を“地域活性化に貢献できる”地域資源へと変化させる必要がある。

このような地域資源の加工を通じ、山舟生地区の地域資源の商品力の向上を図り、地域の活力を向上させ「皆が生き生きと生活できる山舟生地区」の実現を目指すために、WSAは7つの活性化案を提案した。

1点目は、「あじさいウォーキング、あじさいマラソン」である。既に一定の成功を収めているあじさい祭りの成熟を進める。また、あじさい以外にも将来的に百花繚乱となることが期待される三春の桜をイベントへと成長させる。あじさいや桜といった山舟生の自然を活かした「山舟生ウォーキング行事」を花の美しい春、緑の生い茂る夏、柿がおいしい秋と、季節ごとに実施することで集落の活性化を目指す。

2点目は、「ブランド和紙名刺づくり」である。和紙の希少性や独特の風合いを生かしたエグゼクティブ（高級志向）層対象の「高級ブランド名紙産業」をコミュニティビジネスのような形態で興す。高級感を売りとするのが「山舟生ブランド」を育成することへとつながり、かつコミュニティビジネスのような形態で事業を展開し外部発信を行うことで地域の一体感をさらに高め、集落の活性化を目指す。また、コミュニティビジネスを通じ、若者層の雇用の確保を目指す。

3点目は、「和紙づくり体験」である。一般的な日本人にとって身近な存在では無くなってしまった和紙を和紙作り体験を通じ、身近な存在へと変えていく。また右の体験を通じ、地域内外の人々に地域資源でもあり、日本独自の文化でもある和紙に親しみを感じてもらうと同時に山舟生地区の伝統文化の継承を行う。伝統文化の継承をイベント事業とすることで地域資源の存続と山舟生地区の外部への発信を同時に実現し、集落の活性化を目指す。

4点目は、「森のレストラン」である。強烈なインパクトをもつコックさんと食材を「森のレストラン」を開店して外部へ発信することで、山舟生地区を外部へアピールすることを目的としている。「森のレストラン」を通じ、山舟生地区を外部へ発信することで地域外からの関心を集め、それらの関心を他のプランへと結合させることで集落の活性化を目指す。

5点目は、「イノシシのコンビニ弁当」である。イノシシは山舟生地区唯一の食材では無いが、コンビニ弁当というカタチで提供すること試みは新鮮なものであり、山舟生独自の取り組みと成り得るものである。コンビニにおける商品化は、若い世代の興味関心へとつながることが期待される。そのためイノシシ弁当を通じ、若者に山舟生地区の魅力を広めることが可能となり、山舟生地区への観光客の増加を見込むことが可能となる。

若者の興味関心につなげることで、地域ブランド力を高め、観光客増加につなげることで集落の活性化を目指す。

6点目は「あんぼ柿を使ったスイーツづくり」である。あんぼ柿は山舟生地区唯一の食材ではないが、地域を代表する特産品の一つである。そこであんぼ柿をスイーツに加工し付加価値をつけることで、他の地域との差別化を図る。さらに、加工による付加価値の増大とともに山舟生地区の地域経済の活性化を目指す。また、あんぼ柿スイーツを用い、山舟生地区のブランド化を目指す。また、あんぼ柿スイーツを用いた地域経済の活性化に伴い若者層の雇用の確保を目指す。

7点目は「“ホタルの里”山舟生」自然に囲まれた田舎ならではの地域資源であるホタルを地区に戻していく活動を進める。都市部ではほとんどみられないものであり、日本全体で見ても大変貴重な資源であるといえる。まずは、地区内で強化ポイントを定め、そのポイントを“ホタルの住み家”とすべく環境整備を行っていく。その際には、住民全員で環境美化に取り組む必要があるため、地区の宣言のようなものを定めて、住民が一体となって環境整備を進めていくこととする。ホタルの住む環境整備に外部の人々が関わっていくこと、また、ホタルを見たいという外部の人を取り込んでいくことで交流人口を増やし、集落の活性化を目指す。

(2) 活動の限界とその後の動き

①活動の限界

WSA は、2009 年度の約 1 年間に渡り山舟生地区の住民の方々と関わり、山舟生地区が抱える問題点や課題を探り、課題の解決に資する活性化案の作成に取り組んだ。各活性化案については 2009 年 2 月 28 日に住民の方々に報告し、住民の方々から「これはできそうだ」「これは無理そうだ」等といった、活性化案を実行に移すための意見を伺うことができた。また、住民の方からは「行政が追随していくような村づくりをすすめたい。その際には、村がやる部分、行政がやる部分をしっかりと 5 ヶ年計画に組み込んでいきたい。」といった力強い意見も聞かれ、WSA の活動に一定の成果があったことが伺えた。しかし、1 年という限られた期間で、WSA が山舟生地区に入る回数も限られていたために、活性化案は列挙するにとどまり、「具体的にどのように活性化案を実行していくか」といった点については住民の方々との話し合いの場を持つことができなかった。個々の活性化案を精査するための時間がなかった点が WSA の活動の限界であった。

また、住民の方々からは「活性化案に“現場の声”が出ていない。」「生産について全く触れられていないことが不満。新鮮さがない。(提示した活性化案は)有り触れたこと、出回っていることだ。」といった厳しい意見も頂戴した。これは、WSA の調査が山舟生の“実態”を掴んでいないという指摘であった。福島事業によって住民の方々と交流し、温かいおもてなしをうけ、WSA は山舟生地区との「つながり」を持つことができた。そして、住民の方々と山舟生地区の今後についても意見交換をすることもできた。しかし、住民の方々と学生との間まだ遠慮があり、「つながり」のその先にある信頼関係の構築までは踏み込んでいなかった。いわゆる「腹を割って話す」関係が 1 年という期間では構築できていなかった。そのほかにも、「小さな経済循環をつくる仕組み」が必要との結論に達しているものの、山舟生地区にお金を落とす仕組みといった具体策に踏み込めなかったという点も WSA の限界であった。

図 15 2009 年度活動の限界

- ・ 個々の活性化策を実行に移すまで精査できていなかった
- ・ 住民の方々と学生との信頼構築が不十分であった
(「つながり」はできた。でもその先は?)
- ・ 「小さな経済循環をつくる仕組み」の具体策に踏み込めなかった

②その後の動き

WSA の活動には限界があったものの、活性化案の中には実現に向けて動き出したものもあった。活性化案 a) 郷土芸能の成長・発展の中で提案した「部活との連携」案について、梁川高校内に「郷土芸能部」が設置され、5名の高校生が梁川太鼓の練習を現在おこなっている。当初の予定では郷土芸能部では山舟生地区の郷土芸能である「羽山太鼓」を高校の部活動で練習する予定であったが、羽山太鼓を指導できる人がおらず、梁川地区の方が指導することになった。太鼓によって、住民の方々と高校生という山舟生地区外の若者に「つながり」が生まれた。2009年11月7日に開催された「羽山神社の山車祭り」に参加した際にも強く感じたことであるが、「郷土芸能」が持つ力を感じた。

3. 2010 年度活動概要

(1) 再考察

2010 年度、新たに公共 α として「実証実験」を行うにあたって、山舟生地区の現状と課題、そして 2009 年度に提案した活性化案以外に必要な視点について、再度考察をおこなった。以下、順を追って記述する。

①山村地区を取り巻く現状の概要

今日の山村地区を取り巻く社会環境は、高齢化・少子化・人口減少【自然減・社会減】という過疎化と・農林業の衰退という地域の基幹産業の衰退であろう。この過疎化と農林業の衰退という社会環境変化に対しては、地域住民だけの力ではもとより、行政の力を以てしても抗うことは非常に困難な性質のものであるため、地域活性化を検討する上では、ある程度規定のもの、つまり外部環境として観念する必要がある。

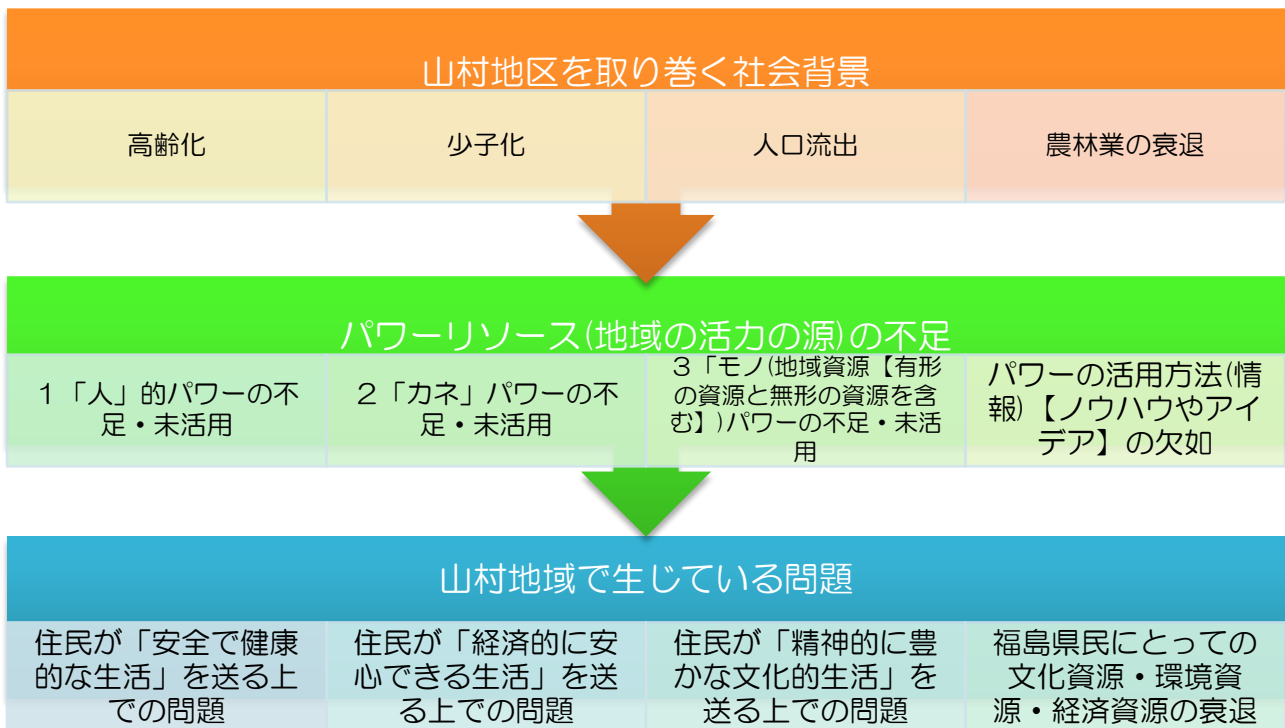
この社会環境の変化が山村地区にもたらす影響は、一言で言えば「地域の活力の低下」、より正確に言えば、「地域の活力の源となる資源の減少・不足」である。というのも、変えられない社会環境の変化の帰結が、即地域の衰退となってしまうのであれば、地域の衰退は人間にはまったくコントロールできない自然現象のようなものとなってしまう。しかし、地域という社会システムは、ある程度人工的に構築されたシステムである。人工的に作られたものである以上、人が全くコントロールできないということはないであろう。

そこで、今日の地域社会の現状を、社会環境の変化により、社会システムが機能するために必要であった資源(システムの要素)の不足や変化が生じていると考えるのがより適切であると考えられる。そしてそのように問題を構成すれば、その解決は、社会環境の変化に対して、変化に適応できる資源(システムの要素)を調達し、それらをうまく結び付けて社会の問題を解決するシステムを構築することで可能となる。

今日の地域の実情を、地域の活力の源「資源」の不足であるとすれば、その具体的資源にはどのようなものがあるか。資源は、一般的に「人」「モノ」「カネ」「情報」といわれる。つまり、地域の活力の源が不足しているとは、活力の源を因数分解すると、1「人」的パワーの不足・未活用、2「カネ」パワーの不足・未活用、3「モノ(地域資源【有形の資源と無形の資源を含む】)」パワーの不足・未活用し、また、資源の活用方法(情報)【ノウハウやアイデア】が欠如として整理できる。

このような地域の活力の源が不足することによって、今日の山村地区は様々な問題が生じている【地域社会システムの機能不全】。生じている問題を類型化すると、①住民が「安全に生活」を送る上での問題②住民が健康的に生活する上での問題、③住民が「経済的に安心できる生活」を送る上での問題、④住民が「精神的に豊かな文化的な生活」を送る上での問題がある。また地域の活力の源が不足し、実際に地域の活力が低下する(上記問題が顕在化する)ことによって、⑤福島県民にとっての文化資源・環境資源・経済資源が衰退するという問題も生じているのである。

図 16



②2009 年度提言内容概要

i) 山舟生ビジョン

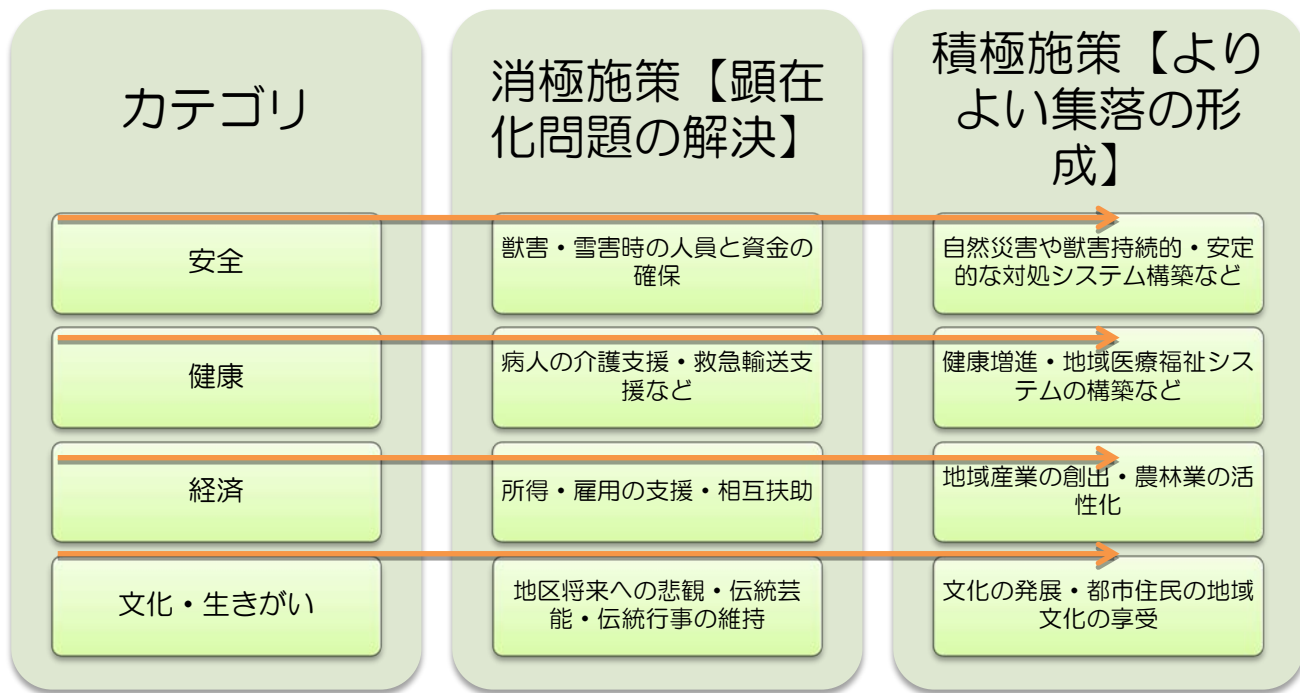
**世代の壁を越え、
皆が生き生きと生活できる山舟生地区！！**

WSA が 2009 年度の活動で定めたビジョンは「世代の壁を越え、皆が生き生きと生活できる山舟生地区」というものである。後段「生き生きと生活できる」とは、地域での生活において、「健康や安全上の不安のない生活」や「経済財的に豊かなものにする」ということだけにとどまらず、地域住民が「精神的に豊か」な生活を送ることができることを目指すというものである。したがって、2009 年の地域での意見交換会や伊達市職員へのヒアリングなどから抽出した山舟生地区で発生している具体的な問題の解決を図るといふ顕在化問題の解決(消極的施策)、さらに、より「生き生きと生活」できる地域にするための積極的な地域づくり(積極的施策)を行うことが必要である。

消極的施策の対象となる山舟生地区で生じている具体的な問題点は、獣害や雪害といった地域の「安全に関する問題」、高齢化や独り暮らしの増加による「健康上の不安に関する問題」、農林業の衰退や高齢化により地域産業が衰退し、雇用や収入面での状況が悪化しているという「経済上の問題」、郷土芸能や地域行事の存続が危うくなっていることや、山舟生への誇りと愛着が低下する恐れがあるなど、住民の「精神的豊かさに関する問題」がある。

これらの問題の解決を図り、さらに、住民が心身ともに健康で生きがいをもって生活できる地域【地域社会システム】をつくっていくことが究極的な目的である。

図 17



この究極目的を達成するための戦略の概要を述べる。冒頭にも述べたが、一般に、ある目的を達成するためには、その目的達成に必要な「資源」と「ノウハウ」が必要である。一般企業などで用いられる経営学では、経営資源は、「人」「モノ」「カネ」という構成要素からなるとされている。そしてこれらの経営資源を「活かす方法」が「情報」である。これは地域において当てはめると、ある地域の抱える問題を解決し、ビジョンを達成するためには、「人」「モノ」「カネ」といった資源を調達し、それらを用いて目的を達成する「情報」(ノウハウ)を備えなければならない。逆を言えば、地域におけるこれらの資源(人・モノ・カネ)や情報が不足するとことで、地域で問題が発生することになる。

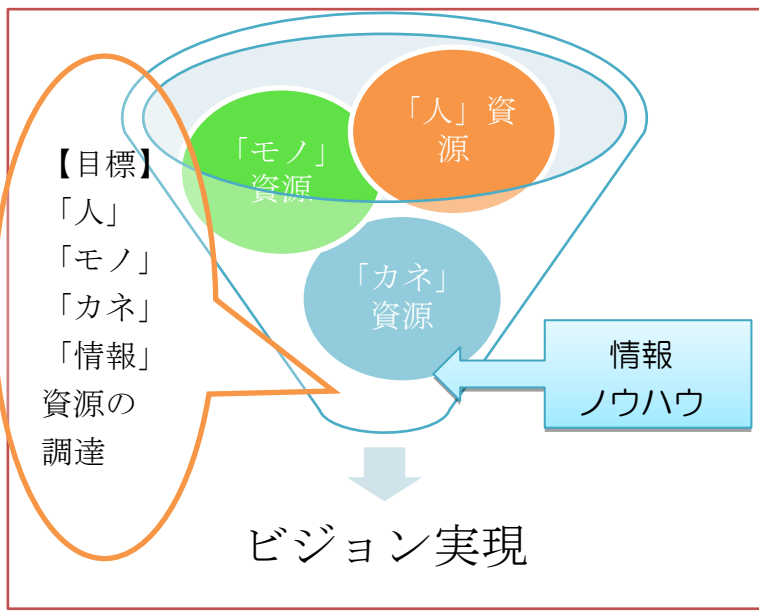


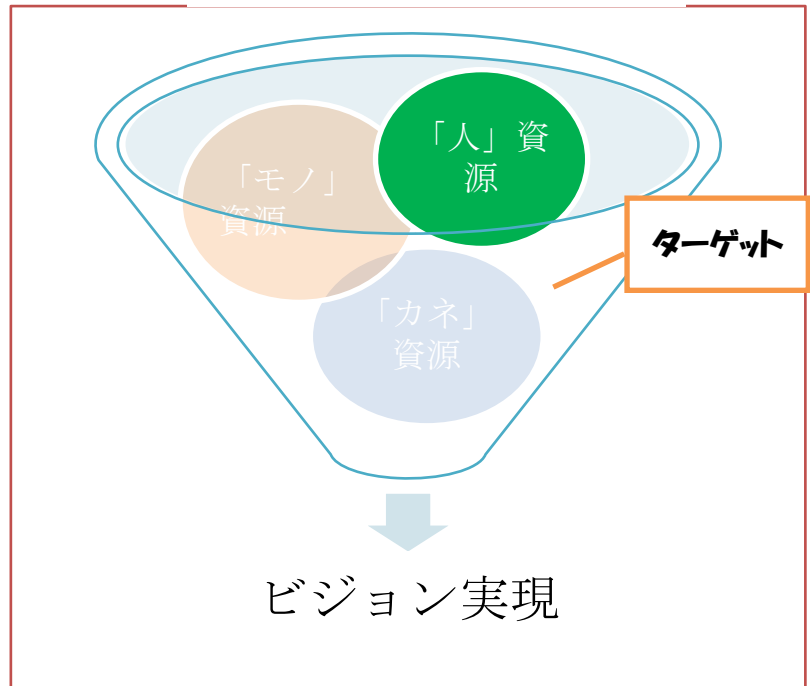
図 18

そこで、地域ビジョンを達成は「人」「モノ」「カネ」や「情報」を調達することが目標となる。

公共 α は、地域の資源の調達戦略の基本的な考え方として「**既存の資源を活かす**」という戦略を採用する。その理由は、長引く不況や、自治体の財政の悪化により、地域資源である「カネ」を増やすということは、行政による支援も難しく、現実的には困難である。そして、そのようなマクロ環境に変化をもたらすことは容易ではないことに鑑みると、「資源を増やす」ことよりも「既存の資源を活かす」、つまり「未活用の資源を活用する」ことや「活用している資源からより多くの効用をもたらす方法を考える」ことが現実的な戦略であると考え。たとえば、資金が足りないからといって資金を増やすということだけを考えるのではなく、現在の資金からより多くの利益をもたらす仕組みを考えることを重視する。また、高齢化や人口減少という社会現象に歯止めをかけるのではなく、地域の高齢化や人口減少が進んでも、当該地域で「生き生き生活できる」方法を考えることが現実的であるという考え。現実的であるということは、戦略の実現可能性が高いということであり、地域の人にとっては希望となり、それをサポートする行政や外部の人たちにとってもそれだけやりがいがあるということにもなる。

図 19

以上のように、WSA は地域の力(資源)を調達するうえで、「既存の資源を活かす」という戦略をとることを採用し、さらに、地域の資源の中でも「人」に着目した施策を提案した。「人」に着目した理由は二つある。一つは、「人」がすべての土台となるからというものである。目的を達成する上で、必要となる「カネ」や「モノ」の内約は、それを実際に活用する人の価値観やマンパワーに規定される。政策目標のどのような側面を重視するのか、誰が地域づくりの活動に従事するのかについての意思決定などがなされて初めて、必要となる「モノ」や「カネ」



が具体的に定められるわけである。したがって、地域づくりの土台となる資源は「人」であるといえよう。これが、WSA が「人」に着目した第一の理由である。第二の理由は、WSA が「大学生」であるということから生じる消極的理由である。「モノ」や「カネ」を調達する戦略を考察するためには、地域に存在するモノやカネについての情報や、それを活かす方法について専門的な知識を必要とする。端的に言えば、「プロ」であることが要求される。ところが、WSA は大学院生といっても、山舟生地区について長年研究して専門家でもなければ、農林業の専門家でもなく、プロのコンサルタントでもない。したがって、モノやカネを調達する戦略を立案する能力はないといってよい。(この点については、事業に関する知見で述べる)。しかし、WSA は地域のコミュニティについては幾分かの研究を行い、他の学生と比して比較優位を有すると自負する。また、学生という身分であるあるがゆえに、行政やプロの人たちに比して、地域の間人関係に直接かかわっていくことに対する地域の人々の心理的抵抗も少ないという利点がある。

以上のような理由から WSA は、地域資源のうち「人」に着目した戦略について調査・考察・立案することとした。

図 20



そして、WSAが地域の人的資源に着目したうえで、山舟生地区の地域ビジョン「生き生きと生活できる」地域を創る基本戦略としてとして定めたものが、ビジョン前段にある「世代間の壁を超える」というものである。「世代の壁を越える」とは、山舟生地区内の横の繋がりや縦の繋がりを醸成することを意味する。これは、先に述べた「既存の資源を活かす」という基本戦略を、地域の人的資源に当てはめた戦略である。つまり、人口減少や高齢化が進展する中で、人口増加を目指すことや高齢化に抗うのではなく、人口減少や高齢化はアプリアリでなものと

したうえで、地域の人的資源の強化を「繋がり」を強化すること【ネットワーク化】によって高めるという戦略である。高齢化によって、一人ひとりの体力が低下することや、人口が減少し、数的な人的資源が減少したとしても、住民間の「繋がり」を強化することで、協力や分業により、人的パワーを維持・向上させることができるはずである。また、高齢者は、体的には衰えたとしても、高齢者の持つ「経験」や「知恵」といった知的パワーに着目すれば、地域の人的パワーにおける「知的資源」はむしろ高齢化によって増加しているといえる⁹。したがって、その知的パワーを実際に地域づくりに活かすために必要な「体力」を有する「若者」と高齢者の「繋がり」を強化することで、地域の人的パワーは飛躍的に高めることができよう¹⁰。

⁹ 「高齢化＝地域の活力の衰退」とする今日の風潮は、高齢化の一側面しか見ていないものであり、そのような見方が、高齢者の誇りと自信を失わせ、また行政にとっても高齢化は、単なる行政の負担増であると考えられる原因である。しかし高齢化は地域内の知的パワーの増加という側面もある。一般企業では、若い新人社員だらけの企業より、熟練ベテランの社員が多くいる企業の方が、企業全体の競争力も上がるということは当然のこととして受け入れられているのに対し、対象が地域となっただけで、高齢化が絶対悪とみなされるのは、不可解であることを超え、理不尽・非合理である。

¹⁰ ネットワークにより人的資源を強化とは、経済学的に言えば、「規模の経済」と「分業による比較優位を活用」し、個々人が対処することができない問題に対処する、あるいはより効率的に問題解決を図ることができるシステムを構築するということである。つまり、既存の人的資源をネットワーク化することによって、その繋がりを活用し、得られる効用を高めることになるため、若い世代を増やす・人口を増加させるといった人的資源強化策と同様の効果をもたらすことが可能となる。さらに、経済学的には説明できない効果としても、社会学的観点から言えば、人と人が「繋がる」ことそのものが、人々の精神的な欲求【マズローの欲求後段階仮説の「所属の欲求」と「他者承認による欲求」】を満たすものである。

ii) 具体的施策

地域資源の「人」に着目し、その力を高めるための施策としてWSAは、①郷土芸能の成長発展施策②高齢者サロンづくり施策③若い力で山舟生を活性化させる施策④地域資源の活用施策を提言した。

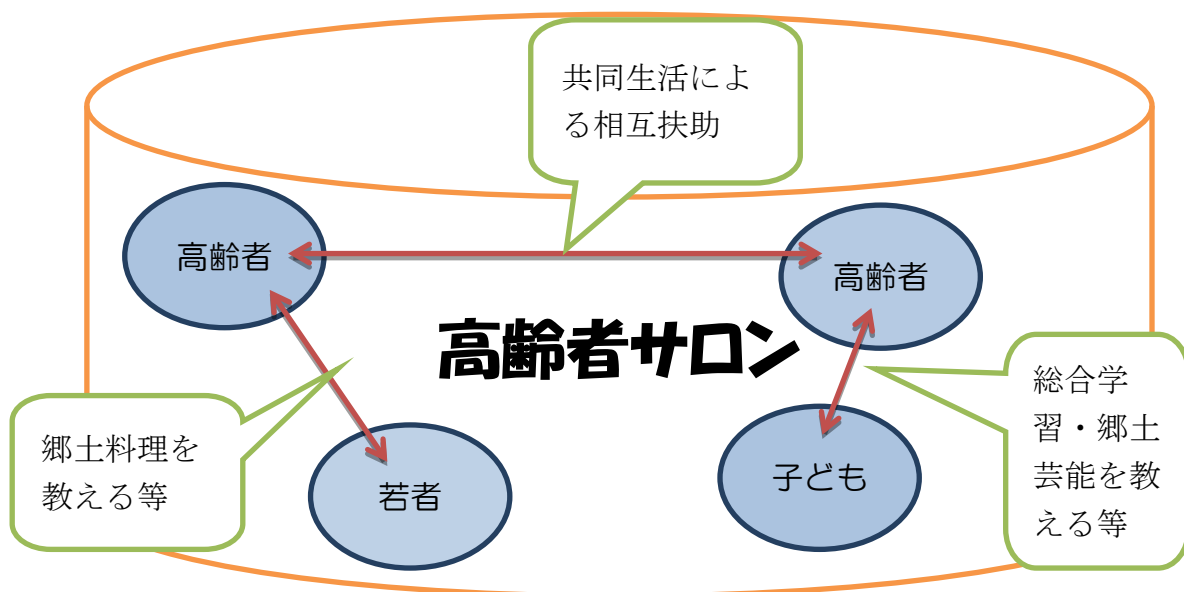
- ①郷土芸能の成長、発展施策
- ②高齢者サロンづくり施策
- ③若い力で山舟生を活性化施策
- ④地域資源の活用施策

a) 「繋がりを強化する」施策

○高齢者サロンづくり施策

b) 「高齢者サロンづくり」の施策は、主に地域住民(高齢者)の「横のつながり」を強化することと、高齢者と若者との「縦のつながり」を強化することを目標とする施策である。

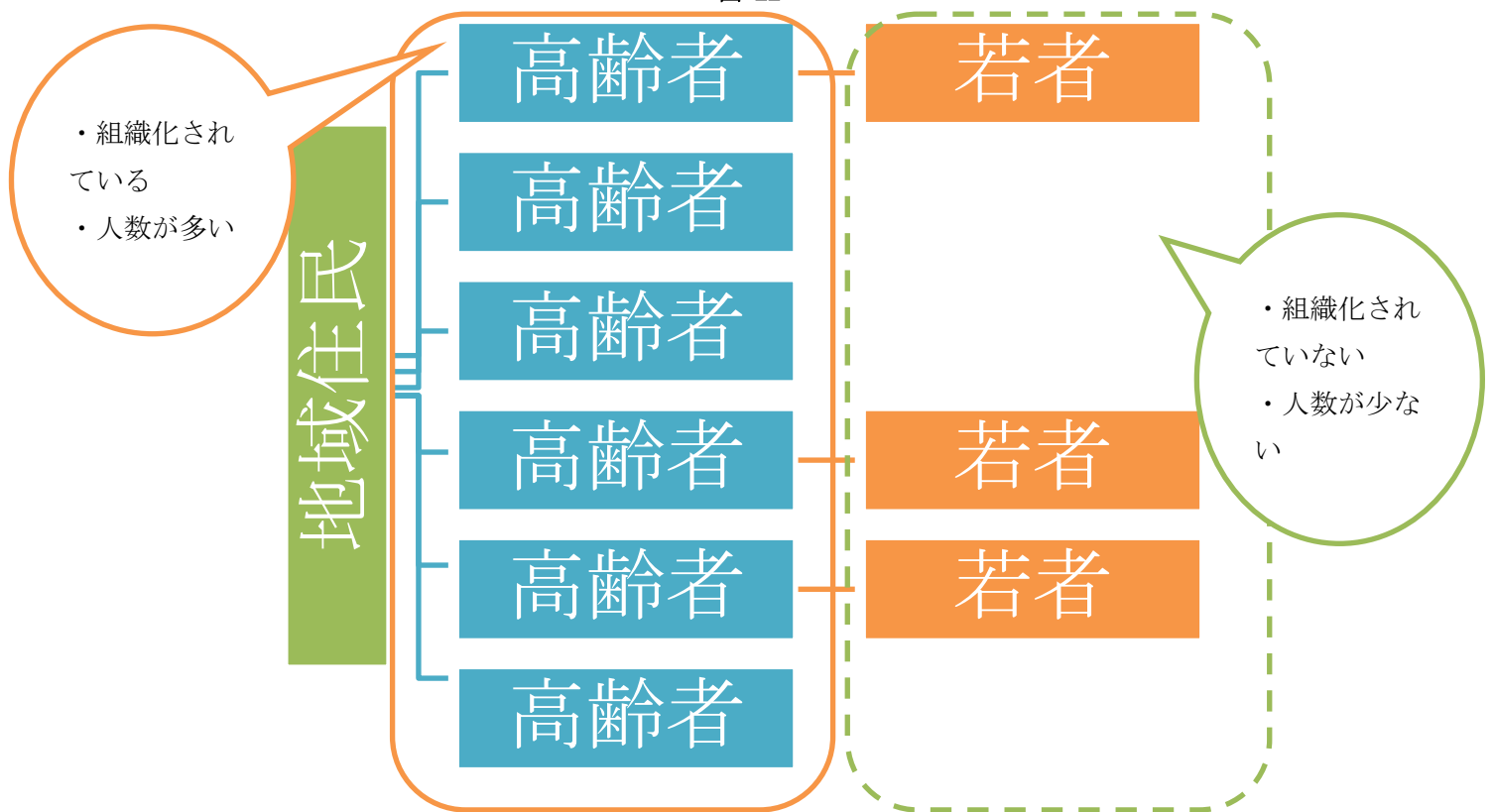
図 21



○若い世代で山舟生を活性化施策

c) 「若い世代で山舟生を活性化施策」は地域住民(若者)の「横の繋がり」と地域の役員(高齢者)との「縦の繋がり」を強化することを目標とする施策である。地域の運営の権限を持つ高齢者は、人数は多いが、体力的な衰えなどにより地域の運営の活動が困難となっている。一方、地域の高齢者の子供世代は、地域外の居住している人が多く人数が少ない。また、地域の運営組織は、高齢者が役職についており、若者世代の組織【昔の青年会のようなもの】は存在していないか、実質的に機能していない。したがって、地域に居住する若者は生業が忙しく、なかなか地域の活動に参画できない上に、人数も少なく組織化もされていないため、地域の活動を行う基盤も弱い。さらに家長制度の名残もあるのか、若者世代の発言権は強いとは言えない(少なくとも若い世代はそう感じている)ため、地域の活動に従事する心理的コストも高い。

図 22



そこで、地域のつながりを形成するうえで、特に、「若者を巻き込む施策」を重点的に取り組む必要がある。そこで、まずは、若者世代を組織化すること。その組織独自で何らかのまちづくり活動を行うという若者間での共通の目的を持つこと。また、その組織を通じて高齢者との協力体制を築くことが有用であると考え。組織を通じた協力体制を構築すべき理由は、若者が一人ひとり個別に個人として高齢者に対して意見することは、高齢者世代に対して遠慮が強く働くことから、組織を通じた協力体制の構築が若者世代の心理的障壁を低くする効果があると考えからである。

WSA が提案した b) と c) の施策は、山舟生地区内の「繋がりを強化する」施策である。b) は高齢者のサロンや公共住宅を創ることによって、高齢者間や高齢者と若者や子供とのつながりを強化しようというものである。c) は地域の担い手として参画が進まないという現状があることから、若者を組織化し、地域の若者を既存の地域の行事や新たなまちづくりに参画させ、若者間・同世代間の「横のつながり」を強固なものにするとともに、高齢者との協力体制を整備することで「縦の繋がり」を強化しようという施策である。

活性化案に対する住民の方々の反応については、b) に関しては図 23 のように多くの意見がだされた。しかし、現行のサロンには高齢者の方々の「横のつながり」はあるものの、若者世代と高齢者の「縦のつながり」の形成にまでは至っていない。

c) に関しては、世代間のつながりが希薄な点については、図 24 のように報住民の方からも多くの指摘があった。しかし、WSA が提案した活性化案の実現に至るまでは話し合いを深めることができなかった。

図 23 b) 高齢者サロンについての意見（報告会にて）

- ・健康維持のためのサロンは作るつもり（現在も 2 地区にサロンがある）。サロンがない地区は、集会所の老朽化に対する耐久工事が終わり次第取りかかる。県の社福協でも推奨している。
- ・サロンはやっていることはやっているのだが、参加者は 70 代ばかり。もうちょっと若い人が参加してくれればよいがなかなか・・・。逆に「私年だから（参加しない）」という人もいる。
- ・サロンで服用している薬の話をするだけでもよい。交わること、心と心の繋がりが大事。これから高齢者の 1 人暮らし 2 人暮らしが増えるが、「1 人じゃないんだ」ということを確認する場が必要。
- ・高齢者の方々は「子どもに世話になるのは 3 日でよい。」と言う。お年寄りはがんばっている。我々よりも自立心が強い。自立心は世代が下がるにつれて柔くなってくるのでは。
- ・年代に応じた施策をしないと共同住宅、共同生活は難しい。

○共同住宅内に設置するサロンについて○

- ・学生はどのようなサロンを想定しているのか？風呂やトイレも共同では皆がケンカする。高齢者皆で生活することは難しい。各人の空間がないとダメ。部屋の区切りがあって固有のスペースを確保し、「隣の人」にならないと共同住宅は難しい。その上で顔を合わせることができる共有スペースがあるとよい。

図 24 c) 若者の巻き込みについての意見（報告会にて）

- ・太鼓を叩ける人はたくさんいるのに、祭りに来ない。世代交代がうまくいっていない。父ちゃん世代が「来いよ」と言わない。
- ・あらゆる団体の世代交代がうまくいっていない。
- ・役員の中に若者を巻き込んでいけばよいのでは。
- ・（若者の意見）先輩方の意見はごもっとも。自分は親父に「出てこい」と言われるので来られている。
- ・（若者の意見）こういう（皆が集まる）場に来られることが地域交流。この場に出るにしても声がかかると来づらい。
- ・若者がこのような場に来るためには、自立していること、勇気を持っていることが必要。
- ・東北大学のある先生は山形県最上郡の戸沢村（月山の麓）を気に入って、空き家を借りて6年間住んでいるらしい。その先生が言うには、地域の人と話し合いをしていると、自然とリーダーが入ってくるそうだ。戸沢村では人口の3倍ほどの人が農業体験（無農薬農業）をしている（角川里の自然環境学校）。コースにして売り出している。
- ・「リーダーをやれ！」と、若い人に強制すると上手くいかなくなる。
- ・先輩がしめ縄づくり等を若い人に教えている。
- ・若い人が都会に流れているのは、山舟生地区が都会から地理的に離れているから。福島市の職場に通うにしても職場の近隣にアパートを借りることを雇用の条件に付けられることもある。地区内にいる若い人をあてにするのではなく、地区外の人を巻き込み、定住してもらうことが必要。

b) 地域の繋がりを強化する「媒体」あるいは「呼び水」を作り出す施策

一方、a)「郷土芸能の成長・発展」及びd)「地域資源の活用」の施策は、地域の繋がりを強化する「媒体」あるいは「呼び水」を作り出す施策である。地域住民の「縦のつながり」や「横のつながり」を強化するといっても、住民にとって、繋がりを創る(あるいは強化する)「インセンティブ」と「機会」がなければ現実には繋がりを強化することは難しい。

つまり、地域での役職に就くことや、組織に属することに伴う、作業負担や義務などは住民にとって何らかのコストを強いるものであり、そのコストを上回る効用があることについての認識がなければ、実際に住民間の「繋がり」が形成されることは

難しいであろう。住民自身が、住民間の『繋がり』を形成することの意義が分からない状態では、仮に形式的に組織化し、繋がりができたとしても、それは「仕方なく」「近所で批判されないように」しただけであって、その繋がりを地域での活動に積極的に活用しようとは思わないであろう。まして、住民が農林業といった住民間の協力(結い)が不可欠なものではない職業に就く人が増えるに伴い、かつての協力体制を維持する必要性は低下していることから、今日において『繋がり』を形成することの必要性の認識やきっかけを提供することは肝要である。

すなわち、今日新たに生じている「健康上の問題への対処」や「文化的生活において住民間の繋がりが必要である」という必要性【明確な目的】に基づき、「繋がり」を形成する¹¹という、新たな目的とその共有、さらにつながりを創る「きっかけ」が必要となる。

このような目的の形成共有と、『繋がり』を創る「きっかけ」となるものを作り出す施策がa)の郷土芸能の成長・発展施策やd)の地域資源の活用に関する施策である。

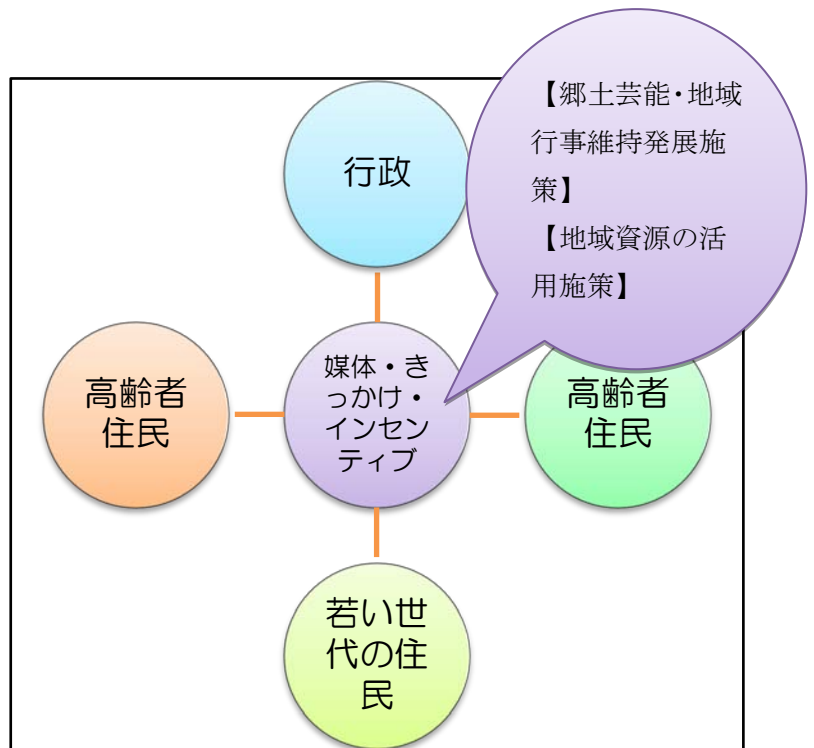


図 25

¹¹ ネットワークを形成する目的に対して、ネットワークの形成・維持コストが下回ると考えれば、ネットワーク形成のインセンティブとなる。また、そのインセンティブに基づき、実際にネットワークを形成するためには、何らかの「きっかけ」が必要である。だれもがそのようなネットワークを形成した方がよいと考えたとしても、「初めに言い出した人がネットワーク形成の責任や高い負担を負わされるのではないか」「賛同を得られるかどうか心配」など心理的障壁があろう。そこで、外部の力できっかけを作り出すことによって、責任や負担を含めて地域住民で話し合う機会をつくり、ネットワーク形成をプッシュする、あるいは適切なサポートで初期にかかるコストを軽減することによって、フリーライダー問題(ネットワークを形成する責任者の負担や初期のネットワークの維持管理は相対的に高いため、ある程度ネットワークが形成されてからその子参加することが、不確実性も低く、費用も安く済むため、誰もネットワークの初動構築者になろうとしない)を生じさせないようにする必要がある。

○郷土芸能の成長、発展施策

まず、a) の郷土芸能の成長、発展施策は、羽山太鼓、除石観音獅子舞、西部笠踊り、山舟生萬才といった多くの郷土芸能や、毎年 11 月におこなわれる羽山神社秋季山車祭といった伝統的な祭りを成長・発展させる施策である。この施策は、「郷土芸能」や「地域行事」が、地域の繋がり「媒体」となることから、郷土芸能を成長発展させることで、地域の繋がり「媒体」の形成を促すという意義がある。実際に WSA の学生が 2009 年 11 月 7 日に学生が羽山太鼓を見学した際には（図 参照）、羽山太鼓を通じて様々な世代の方が交流しており、太鼓が持つパワーのようなものを感じた。「郷土芸能」はあらゆる世代をつなぐことができるものであると実感した瞬間でもあった。また、郷土芸能は地域の繋がり「媒体」の形成を促すだけでなく、地域住民の精神的豊かさを高めるものである。以上の意義から、その保存と発展を図るという施策である。

ところが、地域における郷土芸能は、図 26 に記載した住民の意見からも伺うことができるように、担い手不足であり、地域のつながり「媒体」として機能していない。そこで、WSA は担い手不足を解消するために、交流人口を増やし、他地域との交流によって山舟生地区の郷土芸能ファンを創ることで、他地域の住民を郷土芸能の担い手や、地域の若い住民が担い手となる「きっかけ」とするという方策を 4 つ提示した。(i) 出張太鼓 (ii) 郷土芸能姉妹都市連携 (iii) 部活との連携 (iv) 芸能部の創設である。これらの案は山舟生地区内の「縦のつながり」「横のつながり」の形成を促すだけでなく、山舟生地区外に住む人々とのつながり、つまり「外部とのつながり」の形成にも資する。実際に、梁川高校に郷土芸能部が創設されたことで、山舟生地区と高校生という、「外部のつながり」ができて始めている。

図 26 山車祭りに参加した時の学生の様子 (2009 年 11 月 7 日)



図 27

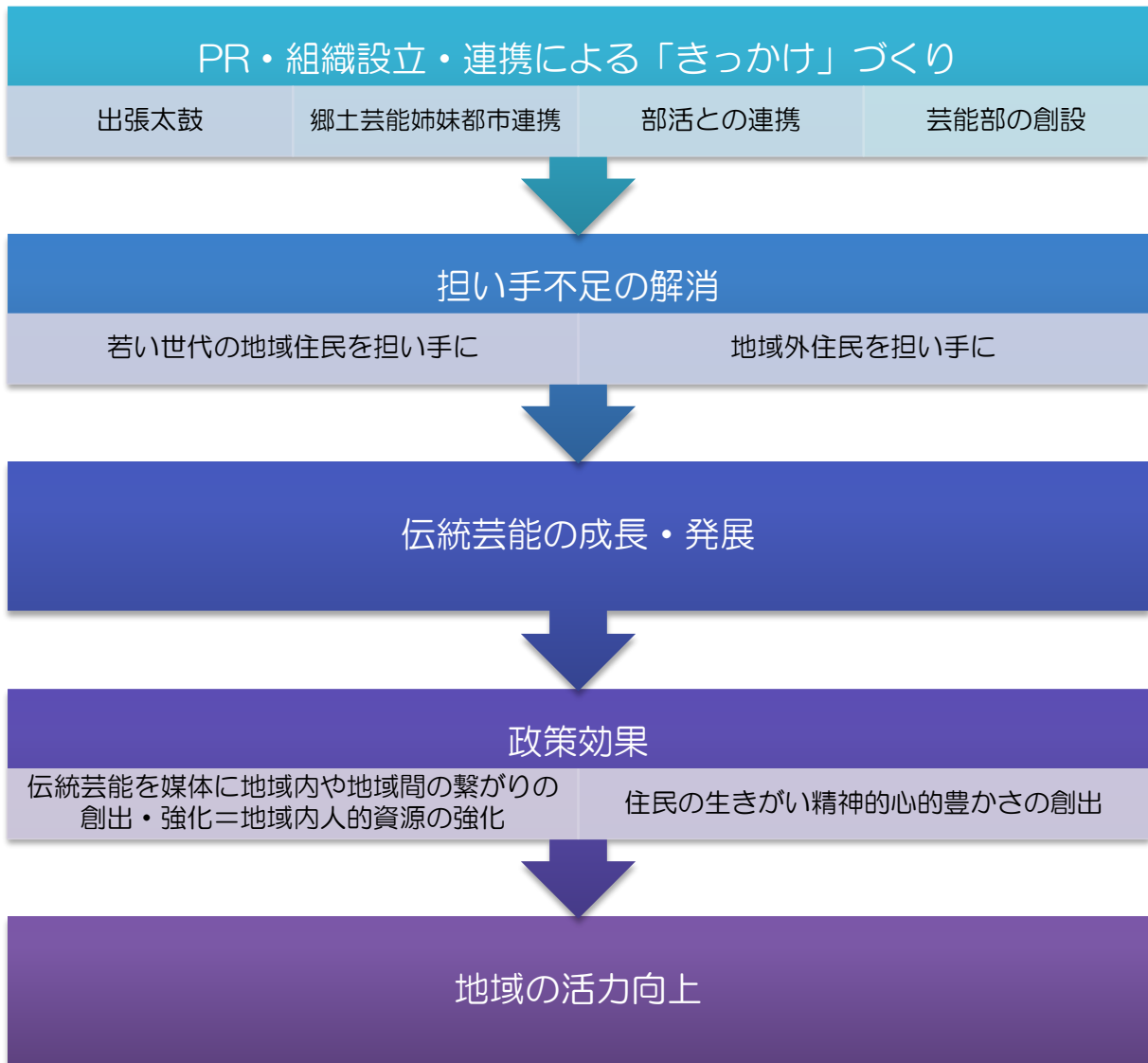


図 28 羽山太鼓についての意見（報告会にて）

- ・太鼓を叩ける人はたくさんいるのに、祭りに来ない。世代交代がうまくいっていない。父ちゃん世代が「来いよ」と言わない。
- ・女性の方々も積極的に太鼓を叩くようにし、女性の人も楽しめるお祭りにしたい。小学校では男女皆が太鼓の練習をするのに、中学生になると止めてしまう人が多い。
- ・小学生への太鼓指導は今年の3月で区切りをつける。指導する中での夢は、子どもたちが佐渡へ渡ること（「鼓童」に入ること）だった。しかし、山舟生の太鼓は全国レベルからは、はなはだ遠い。終わったと思ったからCDを作成した。太鼓は血を吐くくらい練習しないとダメ。
- ・太鼓は発表する場があると練習にも熱が入るのでは。
- ・太鼓連盟に入るのも手だが、そのためには演奏曲が2、3曲ないといけない。

○地域資源の活用施策

次にd)の地域資源の活用施策は、地域資源の活用をもって地域の活性化活動を行うことで、住民の郷土愛の醸成や地域外のファン層の拡大、雇用創出による地域経済の活性化を行い、その活動を通じて、地域住民の「繋がり」をも形成するという施策である。山舟生地区には、数多くの活用可能な地域資源(モノ)が存在しており、地域資源の活用を図るかたちでの地域活性化策を実現することができると思う。

ただし、もちろんこの地域資源の活用施策により、直接地域そのものの経済や雇用問題が解決できればそれに越したことはないが、地域の活性化には長い時間がかかることや、ある程度の資金が必要となることに鑑みれば、いくら豊かな地域資源(モノ)があっても、その活用により地域経済が活性化することについて楽観視はできない。しかし、その活動を通じて、地域住民の「縦」や「横」の繋がりが形成されれば、住民は、生きがいをもって生きていくことができる。また、その繋がりを活かして日常生活での助け合いを行うことが可能となる。つまり、**地域資源の活用を住民が協力して行う活動は、仮に、その結果が経済的に成功しなかったとしても、住民間の繋がりが形成されるのであれば、地域住民の生活を豊かにするという効用をもたらすものである。**WSAは地域資源の活用施策として(i)あじさいウォーキング、あじさいマラソン(ii)ブランド和紙名刺づくり(iii)和紙づくり体験(iv)森のレストラン(v)イノシシのコンビニ弁当(vi)あんぼ柿のスイーツ(vii)“ホテルの里”山舟生などを提言した。

③PRの必要性

WSAは前述した活性化案によって山舟生地区の「人のつながり」を強化することを目指した。これら活性化案のほかに、山舟生地区の住民と地区外の人々との繋がりづくり、つまり「外部とのつながり」を強め、交流人口を増加させるためには、山舟生地区の認知度を高めることが必要となる。現在、山舟生地区の認知度を高める方策としては、PR活動がある。山舟生地区では、概要に記したように多くのイベントを行っているため、イベント開催時にはポスターを作成したり、新聞や伊達市のHPに情報を掲載したりする等してPRを図ってはいるものの、発信が弱い。また、PRはイベント時のみ行っているものなので、通年に渡って「山舟生地区」の認知度を高めるような取り組みを行ってはいない。「外部とのつながり」を強めるためには、PRを強化することが求められる。

(2) 2010年度公共αの活動

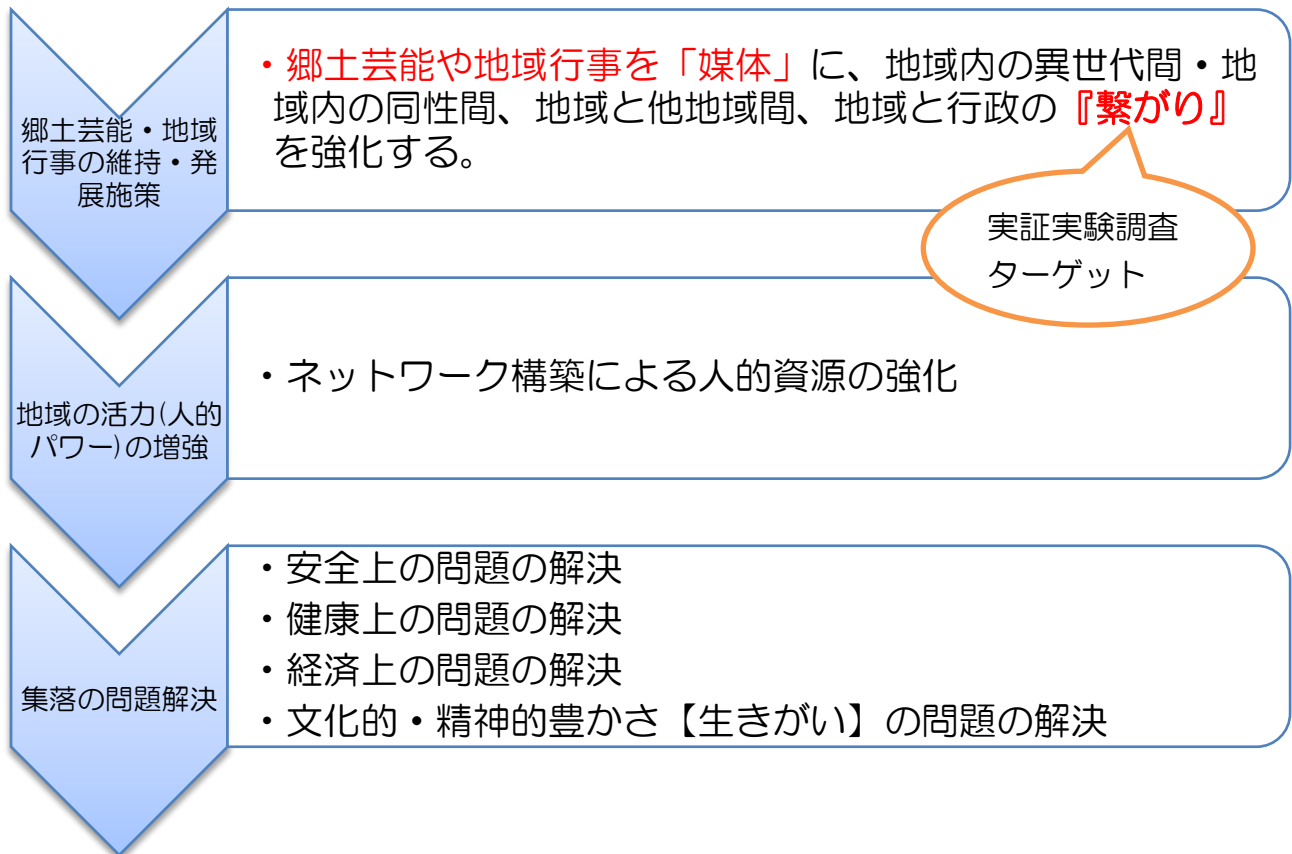
①調査内容

WSAが作成した活性化案のうちa)郷土芸能についての施策については一部が実現に至った。しかし、b)やc) d)の施策を実行するには、人的資源や物的資源・資金などの面で実現可能性に課題が残るものであった。以上の活性化案を地域で報告結果である住民の反応を分析すると、地域で生じる問題を解決する施策であれ、地域の力(資源)を調達する施策であれ、そもそも地域の力(資源)がなければできないということである。また、世代間の繋がりを創る施策については、そもそも若い世代が地域づくりの当事者でないため、報告会においてその必要性についてのコンセンサスを得ることや具体的方法について検討することが困難であった。

郷土芸能の成長強化施策の一部が実現に至った要因としては、地域住民の高齢者を中心に郷土芸能や地域行事についてのニーズが強かったことや、従来の地域の行事をベースとしたものであること、ある程度その実行体制は整備されているということから、その実行コストが比較的低かったことなどが考えられる。

そこで公共αとしての2年目の活動では、「郷土芸能・地域行事に関する施策」について調査し、それにより、「地域住民の縦や横のつながり・地域住民と外部とのつながりを強化」する可能性について、実際に地域行事に参加し、住民の方々と共に検討していくこととした。

図 29 郷土芸能・地域行事の維持・発展施策を講ずることによって期待される効果



②具体的な活動

①で記載した「郷土芸能・地域行事に関する施策」について調査し、「郷土芸能・地域行事」を媒体として「地域住民の縦や横のつながり・地域住民と外部とのつながりを強化」する可能性について検討するために、公共α大きく分けては3つの活動をおこなった。

1つ目は、地域行事に参加することである。WSAの活動の限界でも記したが、2009年度では話を聞くことができた住民の方々は一部の方で、「現場の声が聞かれていない」との指摘をうけた。そこで、公共αは山舟生地区の行事に参加し、1年目以上に多くの住民の方々と交流し、お話を聞くことで住民の方々と学生のつながりを強めることを目指した。具体的には山舟生地区の2つの行事（あじさい祭り、羽山神社の山車祭り）に参加させていただいた。また、山舟生地区の方々と学生の交流の記録を残すために、これまでの活動内容をドキュメンタリー映像として作成する。

2つ目は、羽山神社の山車祭りに参加し、地域住民の縦や横のつながり・地域住民と外部とのつながりを強化する方策を考えた。これらのつながりを強化するために、既存のイベントをどう改善していけばよいのかという点についても、実際に学生が外部の人間としてイベントに参加し、得られた知見を基に改善策を考えた。具体的には、羽山神社の山車祭りに参加する際に、事前に羽山太鼓の練習を行い、当日学生の演奏として披露することを試みた。また、地域内の縦・横のつながりを強めるためには、山車祭りに参加する7山車が連携した羽山太鼓を演奏すれば、山車祭りのメインイベントになり、誘客にも

なると考え、住民の方々に提案し、実現可能性を探った。さらに、祭りに参加した後は、祭りに実際に参加した経験をもとに、地域外の参加者が祭りに参加しやすくするための方策を考えることとした。

3つ目は、山舟生地区の認知度を高め、交流人口を増やすために、PR 方策を考えた。PR 策を講ずることによって、外部とのつながりを強めることを目指す。具体的には、学生がイベントに参加して撮影した映像を、山舟生地区の PR 映像として編集・作成することとした。

図 30 2010 年度公共 α の活動

①地域行事に参加する 【住民と学生のつながり】

→あじさい祭り・羽山神社の山車祭りへの参加

ドキュメンタリー映像作成

②「郷土芸能を媒体とした人とのつながりを強固にする方策」を考える

【縦のつながり】【横のつながり】【外部とのつながり】

→「羽山神社の山車祭り」に実際に参加し、郷土芸能である羽山太鼓の練習し当日演奏・披露

イベント改善策考察

地域外の参加者が参加しやすくなる方策を考える

祭りの魅力をさらに高めるために、7 山車連携した羽山太鼓演奏を提案する

③「山舟生地区の PR 方策」を考える 【外部とのつながり】

→山舟生地区の PR 映像作成

(3) 活動報告

公共 α の 2010 年度の活動スケジュールは図のとおりである。ただし、④⑤の概要については地震の影響で作成を延期しているため、本報告書には記載していない。以下、活動の詳細について記載する。

図 31 公共 α 2010 年度の活動スケジュール

①「あじさい祭り」参加・手伝い (2010 年 7 月 3・4・11 日)

②羽山太鼓練習

山舟生：2010 年 10 月 5・16・23 日、11 月 3 日

仙台：2010 年 10 月 9・26 日

各自個人練習

③「羽山神社の山車祭り」参加・手伝い (2010 年 11 月 6・7 日)

④太鼓練習から祭りまでのドキュメンタリー映像作成

⑤山舟生 PR 映像作成

①「あじさい祭り」参加・手伝い

2010年7月3・4・10・11の4日間で開催された「あじさい祭り」において、公共αは7月3・4・11の3日間参加し、設営や撤収作業の手伝いをおこなった。

7月3日（土）は、山舟生地区の手作りイルミネーションイベントである「ペットボトル」の点灯に参加した。ペットボトルの点灯時間である19時には雨が降り出してしまい、天候に恵まれない中でのペットボトル点灯となったが、雨とあじさいの中で浮かび上がる優しい光に多くの学生が感動した。公共αの学生が参加しなかった7月10日（土）は晴れ、多くの方々がペットボトルを見に山舟生地区に来場したという。

7月4・11日（日）には日中に餅つきが行われ屋台も出ていた。公共αでは餅つきやごんぼ葉餅づくりの手伝いをさせていただいた。その他にも、山舟生地区の組織である「ミドリ会」の方々からそば打ちを体験させていただいた。また、住民の方からブドウのまびき体験をさせていただき、傾斜地でのブドウ栽培の大変さについて身をもって味わった。

あじさい祭りに参加することで、2009年度以上に多くの山舟生地区の住民の皆さまと交流することができた。また、あじさい祭りには2009年度福島事業から親しくさせていただいている立正大学の学生さんが来てくださり、住民の方々だけでなく、大学生同士の交流も深めることができた。

図 32



図 33



TOHO
UNIVERSITY

図 34



TOHO
UNIVERSITY



図 35



②羽山太鼓練習

2010年11月に開催される「羽山神社の山車祭り」に参加するため、山舟生地区の郷土芸能である「羽山太鼓」の練習を行った。公共αは数度山舟生に足を運び、太鼓の練習を行った。太鼓を練習するにあたっては山舟生地区の八巻利吉さんと幕田忠一さんが指導を引き受けてくださり、山舟生林業構造改善センターにおいて練習した。山舟生地区での練習だけでなく、先生が仙台にいらした折に東北大学の敷地内でも練習をおこなった。

羽山太鼓には小太鼓と大太鼓のパートがある。小太鼓が一定のリズムを刻み、大太鼓がメロディーを奏でる。小太鼓がリズムを刻むといっても、ただリズム通りに叩けばよいのではなく、強弱をつけなければならないので、大太鼓と息を合わせることが非常に重要となる。学生たちは最初小太鼓から練習を始めたが、初めのうちはリズムを覚えられず歯がゆい思いをした。リズムを覚えるために、先生方の演奏の様子を動画におさめて仙台に持ち帰り、動画を基に仙台市内のカラオケ店等で自主的に練習を行った。段々リズムを覚えてくると、太鼓を叩くことが楽しくなっていった。また、数回練習を重ねていくと、練習を多く参加している学生とそうでない学生の間に若干ではあるが技術的な差が生まれるように

なった。その際には、練習回数が多い学生が他の学生に叩き方を指導する等、学生同士が切磋琢磨して太鼓の練習に臨んだ。

また、祭り当日のみ参加する学生がいたため、羽山太鼓の簡易バージョンとして、小太鼓のリズムを作成した。簡易バージョンであれば、祭りの当日に来る山舟生地区外の人々や、山舟生地区の住民の方々に太鼓を習ったことがない方々も演奏に参加することができる考えたからである。その他にも、祭りをさらに盛り上げる方法はないかと考え、山車祭りに参加する全7山車（実際は2010年の山車祭りにおいては6山車が参加した）が連携して一斉に羽山太鼓を演奏する時間を設け、山車祭りのメインイベントのひとつにしてはどうかと考え、山舟生地区に提案した。しかし、実現が難しいとの回答をいただき、今年の祭りでの実現には至らなかった。羽山太鼓の練習をした上で、公共αは羽山神社の山車祭り当日に臨んだ。

図 36



図 37



③ 「羽山神社の山車祭り」参加・手伝い

公共αは2010年11月6・7日の2日間にわたって開催された羽山神社の山車祭りに参加した。1日目は早朝から準備を行っている住民の方々に同行し、作業のお手伝いをした。また、今年の上車祭りに参加した6つの上車のうち、「西部同志会」と「三和会」と行動を共にさせていただき、上車づくりや上車の地区内巡行に同行させていただいた。

上車巡行の際には住民の方々と共に太鼓でリズムをとり、地区内を練り歩いた。地区内を練り歩いた後は上車祭りのメイン会場である山舟生小学校にて、宵祭りが始まる。宵祭りでは、各上車が羽山太鼓を演奏した。公共αの学生も各自がお世話になった上車の住民の方々と共に羽山太鼓を演奏したり、学生同士で演奏したり、他の上車に飛び入り参加させていただいて一緒に演奏させていただいたり、楽しい時間を過ごした。羽山太鼓練習時に考えていた太鼓の簡易バージョンリズムは、学生たちの準備不足により残念ながら実践することはできなかった。しかし、昨年は見ただけだった羽山太鼓の演奏を実際に自分たちも微力ではあるが演奏することで、郷土芸能を触媒にした地域内のつながりや、学生と山

舟生地区の住民の方々とのつながりを再確認することができた。宵祭りが終盤になるにつれて、羽山太鼓の演奏者の技術が上がり、学生たちは羽山太鼓の演奏を見学するにとどまってしまうが、教わった太鼓の演奏方法以外にも様々な叩き方があり、羽山太鼓の奥の深さを感じた。

宵祭りにおいては、公共αは羽山太鼓の演奏に参加するほかに、いのしし串焼きを販売する斎藤商店や、農産物直売所の売り子を行った。祭りに参加することで山舟生地区の多くの方とお話をする機会を得ることができた。

山車祭り2日目は午前中だけの開催であるが、山舟生地区内の小中学生と一緒に太鼓を演奏した。また、あじさい祭りに続いて立正大学さんがいらっしゃり、共に太鼓の演奏をして交流を深めることができた。

図 38



図 39



④ドキュメンタリー映像作成

あじさい祭りから羽山太鼓の練習、そして羽山神社の山車祭りにおける山舟生地区の皆さまと公共 α との交流を映像の作品として作成するために、2010年度は公共 α の活動の様子をビデオにおさめていた。これらのビデオはドキュメンタリー映像として編集後、山舟生地区の皆さまにお渡しする予定となっている（地震により作成が延期となったため、本事業終了後に山舟生地区に送付させていただく予定である）。

⑤山舟生地区 PR 映像作成

ドキュメンタリー映像作成のために、公共 α は活動を通して山舟生の魅力である「人・自然・行事」を多く撮影した。これらの映像をドキュメンタリーとして山舟生地区と公共 α の学生だけで持っているのではなく、今後の山舟生地区 PR にも使っていただけないかと考え、ドキュメンタリー映像を再編集し、公共 α で山舟生地区の PR 映像を作成することとした。作成した映像は伊達市役所に送付させていただく予定となっている（地震により作成が延期となったため、本事業終了後に伊達市役所に送付させていただく予定である）。

4. 2年間の活動を踏まえて

我々東北大学公共政策大学院の学生はWSA・公共 α として2年間福島事業に参画した。本章では、2年間に渡る活動を基に、(1)山舟生地区に対して「つながり」を強めるための案を2009年度の提案を踏まえて新たに考察した。また、(2)福島事業については、討論会で挙げたテーマを基に、今後の事業をよりよくするための要望等、学生間で話し合った内容について記述する。

(1) 山舟生地区について

①山舟生地区内の「縦のつながり」「横のつながり」「地区間のつながり」を強める方策

i) 郷土芸能・地域行事を媒体とした「縦のつながり」「横のつながり」「地区間のつながり」の現状

山舟生地区における、郷土芸能・地域行事を媒体とした「縦のつながり(若者と高齢者)」「横のつながり(同世代)」「地区間のつながり(山車どうし)」に関して現在の状況について公共 α が住民の方々から聞いたことや、祭りや太鼓練習に公共 α が実際に参加して気付いた点は図のとおりである。

まず、山舟生地区住民にとっての郷土芸能や地域行事の意義については、職やライフスタイルが多様化している現代においては、郷土芸能や地域行事が地区内のつながりを持つ数少ない理由ともなっており、非常に意義があると考えられる。特に、高齢者世代にとっては郷土芸能・地域行事は誇りや集落の一員としてのシンボルとなっており、その点でも非常に意義があることが伺えた。現段階でも高齢者世代の「横のつながり」は郷土芸能・地域行事によって強固なものになっていることが分かった。また、若い世代の「横のつながり」についても、釣りイベント等の小さなイベントを開催し、同世代でのつながりが強められていることが分かった。

しかし、郷土芸能を媒体とした「縦のつながり」に関しては、郷土芸能の伝承が上手くいっていないとの声が多く聞こえた。若い世代の中には羽山太鼓等の郷土芸能を学びたいと考えている人もいるが、教わる人、教えてくれる人がいないという。祭りにおいては羽山太鼓を演奏できる方々は所属する山車に関係なく、世代の壁を越えて太鼓演奏を行っていたが、あまり演奏ができない方は太鼓演奏の中に入りにくいのではという印象も受けた。

図 40 山舟生にとっての郷土芸能・地域行事とは

○郷土芸能について○

- ・郷土芸能は高齢者にとっては、誇りや集落の一員としてのシンボルである。
- ・羽山太鼓は、若い世代でも叩けるけど、祭りではあまり叩こうとしない(遠慮がある?)人もいる。
- ・農林業での結がない今、地域行事が住民間で広く繋がりをもつための数少ない理由となっている。
- ・若い世代でも太鼓を覚えたいと考えている人もいるが、伝承がうまくいっていない(教わる人がいない)。しかし、子供でも叩ける人もいる(若い世代で郷土芸能についての習得はばらつきがある)
- ・子どもたちは小学校で羽山太鼓を練習しているが、中には太鼓を叩くことを義務的に捉えていて、面倒さを感じている子どももいた。
- ・若い世代の中には太鼓を学びたいというニーズはある。しかし、教わる人がいない。
- ・太鼓を上手に叩ける人だけの連帯感というものがあるように感じた。地域に関わっていても、太鼓をそんなに叩けない人は演奏の中に入りにくいという感じがあった。
- ・所属する山車に関係なく、羽山太鼓を上手に叩くことができる人は他の山車にも「こっちこいよ」と言われて参加していた。
- ・宵祭りでの太鼓演奏などは、地区(山車)ごとにばらばらで演奏している。地区同士の連携を提案(7山車による羽山太鼓の競演)したが、実現は難しいと言われた。

○地域行事について○

- ・全世帯加入の「むらづくり協議会」の協賛金によって祭りを運営している。
- ・あじさい祭りについては、一部の人が資材を投じて運営している。(ペットボトルづくり等)
- ・山車祭りは山舟生全体で行うが、あじさい祭りは一部の住民のみが参加している。
- ・祭りそのものには肯定的であるが、その費用負担について不満がある人もいる。
- ・昔ながらの伝統・習慣きまりごとが多くて、コストがかかる面も多いらしい。コスト削減の余地があるのでは。
- ・参加できる余裕がない人はその場にはいないのでは。
- ・中には義務感で行事に参加している方もいる。
- ・若い人の中には最近行事に参加するようになった人もいる。
- ・若い世代の中で小さいイベント(つり)等を開催しており、横同士の仲はよい。

→郷土芸能・地域行事による「縦のつながり」が弱い

ii) 原因分析

なぜ、地域行事・郷土芸能を媒体とした世代間のつながり、つまり「縦のつながり」が弱いのだろうか。その原因のひとつとして、お互いの遠慮があるのではと、公共 α は考えた。若者の中には「太鼓を学びたい」というニーズがあり、高齢者側にも「太鼓を教えたい」という潜在的なニーズがあるにもかかわらず、お互いが言いだしにくい状況になっているために郷土芸能を媒体とした「縦のつながり」を強められないでいるのではと考えた。

図 41 「縦のつながり」が弱い原因とは

- ・「太鼓を学びたい（若者）」「太鼓を教えたい（高齢者）」という潜在的なニーズはあるのに、お互いが言いだせない状況になっている。遠慮しあっているのではないか。
- ・郷土芸能をやれる人とやれない人で心理的な障壁があるのではないか。
- ・地区間でのつながりはそもそも必要性がない 仕事も生活リズムもばらばら
- ・個人を横断した形でつながることが必要なのではないか。
- ・お祭りを継続させることに意味がある。縦と横のつながり 祭りはストレス発散にもなる

iii) 公共 α が考える改善案

世代間に遠慮がある現在の状況を改善し、地域行事・郷土芸能を媒体とした「縦のつながり」強めるための方法として、公共 α は2点を考えた。

1点目は、ドキュメンタリー映像の活用である。公共 α が作成中のドキュメンタリー映像は学生が羽山太鼓を学ぶ様子が多く収められており、太鼓のリズムについても説明がなされている。そこで、羽山太鼓を学びたいと考えている若い世代にドキュメンタリー映像を配布し、太鼓の練習ビデオとして使ってもらおうという案である。ドキュメンタリー映像によって羽山太鼓についての一通りの流れを掴んだ後は、実際に太鼓の演奏ができる高齢者世代に指導をお願いする。この案は若者世代が映像を用いて太鼓の練習をするという案であるため、「縦のつながり」を強める直接的な方法ではないが、ドキュメンタリー映像をきっかけに太鼓を学ぶ方が増え、若者世代と高齢者世代のつながりが強まることを期待する。

2点目は、2009年度にも活性化案として提案した、コミュニケーションの場づくりである。祭りの際に若者世代に役職を与える等して、若者世代と高齢者世代が関わる環境を整備する。

図 42 「縦のつながり」を強めるための方策

1. ドキュメンタリー映像の活用
 - ・・・映像をきっかけに若者世代と高齢者世代のつながりを強める
2. コミュニケーションの場づくり
 - ・・・若者世代に役職を与える等、環境を整備する

②「外部とのつながり」を強める方策

i) 郷土芸能・地域行事を媒体とした「外部とのつながり」の現状（調査結果）

山舟生地区における、郷土芸能・地域行事を媒体とした「外部とのつながり」に関する現在の状況について公共αが住民の方々から聞いたことや、祭りや太鼓練習に公共αが実際に参加して気付いた点は図のとおりである。

まず、郷土芸能や地域行事自体の魅力については、学生が実際に行事に参加したり、郷土芸能である羽山太鼓を演奏したりすることで、実感としても非常に魅力があると感じた。ただ、公共αは「学生」という立場で事前に山舟生地区の方々との関わりがあったため、地域行事に参加しやすいという部分があったが、山舟生地区と関わりのない全くの外部の人からしてみると、地域行事は内向きな印象を受けた。山車祭りにおける羽山太鼓についても、全くの一見さんからしてみると参加しにくいのではないかと感じた。

また、認知度やPRについては、「山舟生」という認知度や、地域行事や郷土芸能の認知度がまだまだ低いのではないかという印象を受けた。郷土芸能・地域行事を媒体とした山舟生地区と「外部とのつながり」については弱い面があると公共αは考える。

ii) 原因分析

郷土芸能・地域行事を媒体とした「外部とのつながり」が弱い理由は3点あると公共αは考える。

1点目は広報が弱いという点である。地域行事を開催する際には福島県の新聞社や伊達市のホームページに情報を掲載してはいるが、羽山太鼓や山舟生の魅力を伝えるには不十分な部分があるのではと考えた。

2点目は地域行事が「内向き」であるという点である。i)でも記載したが、地域行事の参加を外部の方々にも呼び掛けているものの、山車祭りでの太鼓演奏の参加や、あじさい祭りでのイベント観覧などにおいて、外部の方々が実際に参加する方法が事実上ない。

3点目は外部の方々が遠慮をしてしまうという点である。仮に外部の方が地域行事に参加したとしても、地域行事に係る経費等を自分が全く費用を負担していないので、自分が参加することで山舟生地区の住民の方々に負担を与えていないかが気になり、遠慮してしまう部分があるのではと考えた。

図 43 「外部とのつながり」が弱い原因

- ・ 広報が弱い
- ・ 行事が「内向き」である
- ・ 地域の負担を考え、遠慮してしまう部分がある

図 44 「外部とのつながり」の現状

○地域行事について○

～あじさい祭り～

- ・アジサイは綺麗でアジサイ祭りの斎藤商店での食品は大変おいしく、外部の人にとっても魅力が高い。
- ・一方、地域内の行事であるという雰囲気があり、全くの外部の人間(地域の何のつながりもない人)にとっては敷居が高いのではという印象を受けた。郷土芸能のステージを見るための観客席についても、外部から来た人は座りにくいのでは。
- ・ペットボトル等を見に来場する客は多いが、地区への経済効果は低い(お金を落としていく人は少ない)
- ・くちこみで結構来ている人もいるので広報次第でもっとお客さんが増えるのではないかと
- ・ペットボトルが見やすい場所(フォトポイント)を明示するとよいのでは。
- ・リピーター増加のためのインパクトがないorインパクトがあったとしてもうまくPRできていないのでは？

～羽山神社の山車祭り～

- ・羽山太鼓は、勇ましくリズムで、聞いているだけでも楽しい。外部の人も、「自分で叩けたらいいな」と強く思う人が多いと思う。
- ・祭りや郷土芸能は「観覧者」でいるより「参加者」でいる方が数倍楽しいが(学生の実感)、一見さん(山舟生地区に全く知り合いがいない人)が太鼓演奏に参加する方法は事実上ない。
- ・事前に太鼓を練習していても、住民の方々や他の学生と大きく差があると、演奏の場に入りにくかった。
- ・外部の人が参加しやすかったとしても、全くの費用負担をしなければ遠慮の気持ちが生まれてしまうのではないかと。
- ・学生という立場だったので役割があったから楽しめたが、外部から来る人はふらっと来て、帰るだけという感じ。山車祭りは羽山太鼓に参加できるという部分があるからおもしろい。
- ・一見さんの家族連れで子どもに太鼓を叩かせたい「叩かせてもらえますか」といって参加する方々もいた。
- ・羽山太鼓を実際に演奏してみたら、全身運動で楽しかった 奥深いなと思った。太鼓を叩ける場所は非日常性が高い。
- ・外部の参加者が祭り開催日前から太鼓練習等に参加することは難しいのではないかと。
- ・初心者用、外部の参加者専用の羽山太鼓ブースがあれば、祭り当日でも徹底的に練習して住民の方と共に演奏することも可能なのではないかと。

○認知度・アクセスについて○

- ・祭りや郷土芸能について、その存在自体の認知度が低い(福島県出身の学生も「梁川」の地名は知っていたが、「伊達市」「山舟生」については知らなかった)。
- ・交通インフラや時間などの問題で、アクセスはよくない(移動コストが高い)
- ・外部から来たカメラマンがいた。ケーブルテレビも取材にきていた。
- ・以前は山車祭り開催時には送迎バスが出ていたが、現在は出ていない。

iii) 公共 α が考える改善案

郷土芸能・地域行事を媒体として「外部とのつながり」を強めるためには、3つのステップを踏むことがよいのではと公共 α は考えた。第一のステップとして、広報強化を行い、第二のステップとして「山車祭りツアー」と称する外部の方が参加しやすい体験ツアーを設置する。そして第三のステップとして山舟生に関わる外部の人を増やすためにファンクラブを設置する。

a) 広報強化

第1のステップは「広報強化」である。山舟生の魅力を今まで以上に伝えるために公共 α は2点提案する。

1点目は、2009年度にも提案した「出張太鼓」の開催である。学生の実感であるが、太鼓演奏を実際に肉眼で見るとはテレビや新聞、映像で見るよりも感動が大きい。そこで、2009年度に提案した「出張太鼓」によって羽山太鼓を実際に外部に向けてアピールすることが重要だと考えた。学生の話し合いの中では福島県の観光イベントとして福島県の各地のお祭りを集めたイベントを開催し、そこで山舟生地区に興味を持ってもらって実際の地域行事に参加してもらおうという案もでた。現在、福島県では県内の山車祭りが福島市に集まる「山車フェスタ」を毎年開催しているので、山車フェスタ内で「出張太鼓」を披露することは、実現可能性が高いと考える。

2点目は、PR映像の活用である。公共 α が作成している山舟生PR映像を伊達市役所と福島県庁にお渡しし、支庁内で流してもらおうという案である。これまで山舟生地区は地域行事の開催時期にPR活動を行っていたが、支庁内でPR映像を流してもらおうことによって、1年を通して山舟生の広報が可能となる。また、学生内の話し合いでは、作成したPR映像をCMコンテストに出品するとよいのではとの意見もだされた。コンテストで賞を獲得すれば、1年間のうち数回山舟生地区のCMを流してもらえるので、PR効果は大きいと考える。出品については、基礎自治体である伊達市との連携が必要となる。

b) 山車祭りツアーの開催

広報体制を充実させたいと、地域行事における「内向き」な体制を改善させるための第2のステップとして、「山車祭りツアー」の開催を提案する。

この案は、外部の方々に羽山神社の山車祭りを「見る」だけでなく「体験」してもらおうという案である。外部の方は山車の同行や羽山太鼓の演奏を体験する。羽山太鼓については、各山車に設置されている太鼓とは別に、初心者のためのブースを設け、外部の方々はブース内で山舟生地区の住民の方から指導を受けることができる。初心者ブースで練習を積んだら、各山車に行き、住民の方々と共に演奏を楽しむという案である。宿泊については、民泊を想定する。

山車祭りツアーの開催によって、これまでは行事や郷土芸能を一方的「見る」だけだった外部の方々と山舟生地区住民の方々との「つながり」が強まり、地域行事へのリピーターも増加すると公共 α は考える。

c) 山舟生ファンクラブの設立

広報を強化し、外部の方々が「体験」する環境を整えることで「内向き」である状況を改善したら、第3のステップとして「山舟生ファンクラブ」の設立を提案する。

この案は、山舟生地区住民によって構成されている「山舟生住みよいむらづくり協議会」内に「山舟生ファンクラブ」と称する、山舟生地区外に住む人を対象とした外部メンバー制度を設けるという案である。外部参加者は一定の協賛金を支出し、あじさい祭りのペットボトル点灯や山車祭りの山車設営等に参加する。

外部の方々も一定の費用を負担することで、外部参加者の遠慮を取り除くことができ、反対に住民の方々の負担感も一定程度解消され、お互いが心の底から郷土芸能や地域行事を楽しむことができるのではと考える。外部の方々の費用負担については、前述のようにファンクラブを作って協賛金として会費を負担するという他に、地域行事開催時に募金箱のようなものを設置して、運営協力費として募金を募る方法も学生の中から意見として挙げられた。

(2) 福島事業に対して

福島事業は図に記載したとおり、①「外からの力」を投入することにより地域の振興を図ることと、②集落の応援者（サポーター）としての大学生を育成していくことを目的としている。

我々は2009年度はWSAとして福島県伊達市山舟生地区に入り、祭りなどの行事にも参加しながら、地域住民と地域の目指すビジョンを議論し、夢マップを作成した。2010年度は公共αとして2009年度に提案した活性化案の実施可能性等を検討・検証するフォローアップの期間として活動し、公共αは郷土芸能や交流を重視していたことから、特にお祭りなどの行事に参加しながら、多くの住民と交流し、集落での暮らしについて伺い、集落の将来について議論した。また羽山太鼓を学生が地域住民の指導のもと練習に励みお祭りでの演奏するという形での地域行事参加にもチャレンジした。

2010年度をもって、福島事業と公共αの関わりは一応の期限を迎えることから、我々が感じたことや気づいたことについて、討論会でも議題に上った「交流の継続性」「地域住民と学生の意識」を中心に記述する。本来であれば、学生から挙げられた意見については福島県の担当者の方々にお聞きした上で報告書に記載することを予定したが、この度の地震によって担当者の方へお話を伺うことが困難となってしまったため、学生からの一方的な意見にとどまってしまっていることをご了承いただきたい。以下、学生から挙げられた意見について列挙していく。

図 45 福島事業の目的（下線は公共αによる）

平成22年度「大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業」

1 目的

過疎・中山間地域にある集落の中には、高齢化の進展や地域の担い手不足などにより、地域住民の従来の活動や努力だけでは集落の維持・活性化が困難な状況が生じてきているところもあります。こうした集落に、大学生の持つ新しい視点や行動力、専門技術・知識など「外からの力」を投入することにより地域の振興を図るとともに、集落の応援者（サポーター）としての大学生を育成していくことを目的とします。

①交流の継続性について

福島市での討論会でも多くの人が指摘していたように、福島事業は単年度の事業であるため、「交流の継続性」を確保することが難しくなっている。また、事業実施時学生であっても、就職・進学などで福島・東北地域を離れる人も少なくない。地域と学生が今後も交流の継続性を持たせるためにどのようにすればよいのかという点について、学生から挙げられた意見・要望を以下、箇条書きにて記載する。

図 46 交流の継続性についての意見・要望

○今の学生（公共α）と、地域との交流の継続性について○

- ・学生が社会人になった後も、福島県が主体となってメーリングリストや SNS のようなものを作成し、学生と地域の橋渡しとして情報提供を行ってほしい。
- ・社会人になると毎年地域に入ることは難しいが、交流は続けていきたい。数年後になっても地域に行けるようにするためには、お互いの「認証」があると行きやすい。「地域のサポーター」として、名簿みたいなものを作成するとよいのでは。
- ・学生側と集落側ではなく、学生個人と集落住民個人という、個別に連絡できる体制もあるとよいのでは。
- ・福島事業専用の HP みたいなものをつくり、掲示板等で情報交換を行ったり、トップ画面に各集落の情報提供を行ったりするとよいのでは。
- ・上記福島事業専用 HP 内で、個々の大学が行うプロジェクトの情報を掲載してほしい。お互いの大学の情報交換の場にもなる。情報収集することで、大学同士が良いところを活用することができる。
- ・公共αのような形（期限の決まったチーム）で集落に入ると、他大学のようにゼミ形式ではないので、授業という形では1年しか入ることができない。ゼミ形式でない大学に対するフォローアップ体制を充実させてほしい。

○今後地域に入る学生（公共α以外の学生）と地域の交流の継続性○

- ・仮に、同じ地域に今後他の大学生が入ることがあれば、情報収集や調査が1からやり直しにならないように、過去に集落に入った学生がしっかりと情報提供をおこなうべき。そうしないと集落側が「交流疲れ」してしまう。
- ・大学生のデメリット（情報不足）を埋めることが必要。

○その他○

- ・そもそも「大学生」が集落に入ることがよいのか。交流を継続させることを考えると、大学生は土地を離れてしまうので難しいのでは。大学生よりも当該集落に縁のある人で、現在は集落を離れている人や、地域活性化に興味のある人を募ったほうがよいのでは。

②地域住民の認識と学生の意識について

福島事業に対し、地域住民がどのように感じていたのか、何を期待していたのか。そして学生との実際に2年間の活動を通じて今どう感じているのかについては、今後の事業のあり方を考える上で重要な考察要素となろう。しかしながら、学生サイドとしても住民の意識についてどれほど把握できているか

というと、残念ながら十分とは言えない。その要因は、①学生と実際に交流した住民は、集落のごく一部であり、かつ偏りがあること。②学生に対し、遠慮や気遣いから、本音で話してはいないということも十分考えられる。③また、地域住民が当事業の趣旨や目的などを知らない、あるいは十分に理解していない場合なども散見され、「当事業に対してどう感じているか」という以前の問題ともいえる。このようなことから、学生は住民の当事業に対する意識を十分には把握していない。以下、詳細に検討する。まず、①に関しては、事業活動を通じて学生と直に話すことが多かった住民は、地域の取りまとめ役をしている方など、何らかの役職に就いている人がメインであった。そしてその方々は、主に年齢は60代～70代がほとんどであり、世代の偏りもある。地域での活動の取りまとめをしている方とそうでない方では、地域の活性化に関する意識や持っている情報などに違いがあると思われる。世代によっても異なるだろう。しかるに、住民の望む地域の在り方や、現状認識において地域の全体の意見や平均的意見を把握したい場合、この事業における住民サイドの従事者の偏りは無視できないものがあると思われる。

次に②に関しては、率直に言って「福島県の事業で大学生が地域に来ている」ということから、住民には相当程度の「遠慮」があったのではないかと感じている。まず、「福島県の事業」であるということは、「役所の仕事」であり、しかも市役所などの基礎自治体ではないという意識が住民にはあったのではないだろうか。一般に特に高齢者世代は「お上」である役所の仕事や職員に対する畏怖や遠慮が強いと言われるが、当事業対象地域においてそれは妥当していたように感じる。しかも、基礎自治体ではなく、福島県庁という大きく、普段の日常生活においては親しみのない自治体の事業であることから、住民に相当程度の遠慮と警戒心もあったということは想像に難くない。

また、参加する大学生は住民にとって子供や孫の世代である。したがって、住民から見た学生は、ともに地域課制化活動に従事するパートナーというより、「お客様」であり、遊びに来てくれる子供のように感じ、事業に対する批判的な意見など厳しいことは言いにくかったのかもしれない。

最後に③に関して、公共 α が多く祭りの祭など地域の行事に参加したことから気がついたものである。先に述べたように、通常集落活性化に関するワークショップなどでは参加する住民は一部であったが、「祭り」などの地域の行事では、若い世代も含め多くの住民が参加する。そして当チームは祭りに学生も参加し、山車を引き太鼓をたたき、ともにお酒を飲むことで、多くの住民と話す機会があった。その様な交流を通じて、普段を地域活性化の話し合いなどでは話をしたことがなかった人や若い世代の人たちの意見などを聞くことができた。とりわけ、祭りでは「お酒」が入るため、住民の本音に触れることもできた。住民の方々の中には、「大学生が地域を変えてくれる」といったように大変強い期待をしてくださる方もいた。

一方で学生は当該事業についてどのような意識で臨んでいたのだろうか。公共 α の学生は福島事業の目的にも記載されているように、「集落の応援者（サポーター）」という意識で臨んでいた面が強かった。地域を調査し、地域がよりよくなるような案を学生なりに考えるが、住民の方々が期待して下さるような「地域を元気にする」「地域を変える」といったようなことは我々の力では無理であった。そのため、住民の方々の認識（大学生が地域を元気にする）と学生の意識（集落とのつながりを持って応援者となる）に齟齬が生じ、中には「遊びに来ているだけなのではないか」「何をしに来ているんだ」といったご批判も頂戴することもあった。会津若松の討論会でも、「福島事業は何を目的にしているの

か」という点が話題に挙がったが、ここでは「地域住民の認識と学生の意識」という観点から、大学生が集落活性化のために果たしうる役割について考察した。

地域のヴィジョンを住民から抽出すること

集落活性化策を考えていく活動には様々な方法があるが、基本となる行程は共通している。すなわち、①現状認識[今集落はどのような状態にあるのか]②目的設定[どんな集落を目指すのか]③問題抽出[目的で設定した集落像と現状とのギャップを抽出し集落の問題点を設定する]④解決策立案[現行制度の活用や他地域の事例などを参考にしながら、問題を解決する方法や必要となる資源・期間・アクターなどを考える]⑤問題解決へのアクション[解決策を実行に移しつつ、その都度発生した問題に対処する]である。①と②は入れ替わることもあるが、現状認識と目的設定がなければ集落活性化には不可欠な行程である。そして現状認識と目的設定の質[現状を正しく認識できているか。設定した目的は地域住民の意見を代表しているものと言えるか。現状や目的をアクターが共有しているか。より広域的な地域政策のビジョンと整合性はあるかなど]がその後の問題設定の適切さや解決策を実行する上での実現可能性を左右する。さてこれらの工程を踏む地域活性化活動で大学生が参加することの意義について、本事業での経験を踏まえ考察したい。

まず、①現状認識においては、作業の過程に大学生が入ることの意義は、現状を多角的に分析することに資する可能性があることにある。よく言われることだが、「外部から見た地域の姿」すなわち、住民は地元の自治体では気がつかない地域の問題点やよいところが、他地域の大学生によって見えてくるともあるかと思う。また、大学生は地域住民よりも年齢も若いことから、「若い人から見た地域」という視点からも現状を分析できる可能性がある。とくに自然環境や伝統文化などの価値は地域に住む住民や高齢者にとっては珍しいものではなく、その価値を過小評価してしまうことが多い。ともすると、伝統や文化を維持する費用や、豊かな自然環境故にもたらされる自然災害や不便さばかりに着目してしまうこともある。

ただし、現状把握作業において大学生の力を過剰に期待する傾向もあるようでその点注意が必要である。事実、我々東北大学公共政策大学院チームでの地域でも、住民の方から「この地域はどんな地域だと思うか」「この地域のいいところは何か」といったことを質問されることは多く、外部の視点というものへの興味は過疎地域住民にとって大きく、大学生に対してもその点の期待は大きかったようである。さらに、「地域の人々の暮らしが豊かになるにはそうすればよいか」「葉っぱの町おこし（徳島県上勝町）のようなアイデアはないか？」といった地域活性化のための起死回生策となるような資源はこの地域にないか、それを見つけてほしいという要望もあった。しかし、このような期待にこたえるために必要となる「現状」を把握することからして学生の力には限界がある。

なぜなら、まず、大学生は地域の外部の人間であるがゆえに、地域の実情の情報をほとんど持っていない。したがって、住民の日々の暮らし上の問題点については、そこに住んでいない上に、生活習慣も異なるため、地域の実情を把握するには、定期的な地域の訪問と幅広く質の高いヒアリング調査を行わなければならない。また、大学生は地域活性化のプロでもなければ、社会人でもないため、産業や政策についての知見もないため(専攻により多少の差はあったとしても)、大学生から当該地域の基礎自治体職員や地域で働く人以上の情報を得ることは困難である。さらに、通常、地域外の人間が地域に入って得られる情報は、観光地としての情報、すなわち観光資源に限られる。なぜなら、外部の人間は、当該地域

に入る際に、地域の住むことを前提に入っているのではない。また、頻繁に地域を訪れるとあって、せいぜい週に一回程度が限界である。そのうえ左記に述べたように地域住民からは「お客さん」として迎えられてしまうため、大学生は「観光客」としての目線で地域を見ることになる。したがって「居住地としての地域」としての現状や問題点は把握することは難しい。

そして、大学生は「観光地としての地域」可能性や問題点を把握することすら難しい。なぜなら、多くの過疎地域は観光地として「洗練」された地域ではない。つまり、観光資源は、観光客の目につくように、観光客が楽しみやすいように整備されたものではなく、「潜在化」している。とすれば、外部の人間が当該地域の観光資源や産業資源を発見するためには、潜在化している資源が町おこしの力となる可能性を発見しなければならないが、「潜在化」している当該地域の資源から得られる効用を実際に体験することはできない。したがって、資源の専門家でもなければ、それを生かすビジネスなどの経験もない大学生には、その様な可能性を発見することも難しい。なぜなら、潜在資源の発見過程はとほすなわち、以下のいずれかのパターンであると思われる①他地域の活用例を知っており、当該地域でも有用ではないかという仮説を立てること②当該地域の潜在している資源そのものについて詳しく、さらにそれがビジネスや観光で生かすノウハウを知っていることから、そこに資源の有用性を発想することである。しかし、先に述べたように、大学生は「町おこしのプロ」ではないため、他地域の事例を詳しく知っているわけではないため、他事例から着想を得ることは難しい。もちろん大学生も他地域の事例について研究を重ねればこのような着想も不可能ではないが、当該地域の自治体職員やプロの地域コンサルタントなどに比べると相対的にその質は低いと思われる。また、たとえば、農学部系の大学生であれば地域の農産資源について詳しいことはあったとしても、それを「活かす」方法となると、ビジネス経験もない学生が、当該資源を「有用資源」と認識することは難しいと思われる。

このように、現状把握作業において、大学生の「地域外からの視点」「若い世代からの視点」という要素を加味するという意味で、一定の意義はあると思われるものの、「地域の実情を知らない外部の人間」であり「まちおこしや地域資源のプロでもない」大学生であるがゆえの限界があり、過剰に期待することはできないと思われる。

地域の実情を最もよく知るのはなんといっても当該地域住民や基礎自治体職員であり、現状把握作業において重要なのは、地域住民は基礎自治体職員が、各自で断片的に持つ地域の情報を、まとめ、共有することである。したがって、現状把握作業を主体的かつ中心的担うのは、当該地域住民および基礎自治体職員である。

ただし、地域住民や自治体職員を中心に地域の現状を把握するといってもそこに課題もある。すなわち上記のように地域の事情に詳しいといっても、情報は住民や自治体職員に断片化されており、それをいかにして集約するかという課題がある。

住民の持つ地域の情報を集約するためには、多くの住民が参加するまちづくり協議会のようなものを開催するか、住民一人一人にヒアリング調査をするなど、個々の情報を集約するシステムを作らねばならない。いずれの方法をとるにせよキードライバとなるのは住民のモチベーションである。いかに効率的なシステムを用意しても、住民自身が地域活性化のために情報を集約しようと思わなければ、結局、地域の役についている人を中心にした一部の情報に偏ってしまう。

さらに、住民の持つ情報を集約することだけでなく、それらの情報を自治体職員とも共有しなければならない。住民が主役になってまちづくりを行うことと、住民だけで街づくりをおこなうことは、大きな

差がある。当該地域を取り巻く地域との調整も必要になる場合もあるし、現在行われている地域政策の現状を把握するという意味でも、基礎自治体職員が地域の情報を住民から得ることは非常に重要である。しかしながら、住民間のコミュニケーション以上に、住民と自治体職員のコミュニケーションは難しい。やはり、普段からの顔なじみでないということに加え、「お上」への遠慮もあるであろうし、また、日本特有の「お上」への依存体質から、住民から自治体職員へのコミュニケーションは「陳情」ばかりとなってしまう、ネガティブな情報に偏ってしまう危険性がある。

我々東北大学公共政策大学院αは、今回の事業を通じ、この住民間や住民－自治体職員間のコミュニケーション上の課題にこそ大学生が貢献できる可能性があると考えている。すなわち、大学生は上記コミュニケーションの「きっかけ」「クッション」「モチベーション」を地域に与えることができるのではないかと考えるのである。さらに本事業には二年目に実証期間があり、その期間があることで「計画倒れ」にならず、仮に失敗したとしても、そこから次につながる教訓を得ることができる。

大学生に期待できる機能①－「コミュニケーションのきっかけ」

- ・お金や人的負担をあまりかけず、プロジェクトを始動できるため、とりあえず最初の一步を踏み出すことができる。

- ・外部の人が地域に入り、公的事業としてプロジェクトが立ち上がることで、地域の人「とりあえずやってみよう」と考える。

- ・大学生は考えが浅いため、地域の将来についての話し合いの場において、浅慮ゆえにどんどん意見を出すことができる。学生の考えの浅はかさゆえに住民の反応はネガティブなものになるかもしれないが、そうで反応であるからこそ、住民自身が地域のことを考えざるきっかけとなる。

大学生に期待できる機能②－コミュニケーションのモチベーション醸成

- ・外部から評価されることによって地域を良くしようという気持ちになる。
- ・若い世代と交流することで、自分の地域の将来のことを考える
- ・普段発言権のない若い世代が地域外の人や自治体職員を交流する機会を得ることで、主体的動こうと考える

大学生に期待できる機能③－コミュニケーションのクッション

地域住民間のコミュニケーションは①同世代間②世代間③住民と行政という三つのルートがあるが、①については、農林業や子育てなど獣印鑑の「共通性」が低下したことから、コミュニケーションが従来に比べ疎になっている。②については、そもそも地域内に高齢者の子供世代が居住しないケースも多く、コミュニケーションは疎になっている。また同地区に居住する場合であっても、村落の家長制度の名残により、たとえ40～50代であっても、地域のまとめ役である60～70代の世代に気軽に意見を言えるような「空気」にはないというのが、本WSが地域に入りヒアリングなどを行ったうえで得た結論である。以上のように、地域内でのコミュニケーションは疎になりつつあるのが現状であり、それゆえに地域の人的パワーを十分に生かすことができないという問題が生じている。

そこで、大学生が県の事業により地域に入るということは、①②③のコミュニケーション上にある心理的な壁(抵抗感)を和らげるクッションとしての役割を期待できると考える。また、基礎自治体と広域自治体のコミュニケーションの促進効果も促進できる可能性があると考えられる。

大学生の役割については上記の役割が期待できることを踏まえ、今後の福島事業について学生内から挙げた意見・要望について以下箇条書きにて記載する。

図 47 地域住民の認識と学生の意識に関する意見・要望

- ・大学生の役割は上記のもの（コミュニケーションのきっかけ・モチベーション醸成・クッション）に限られるので、事業の目的から絞る（大学生が住民同士のコミュニケーションのきっかけづくりとして、討論会を開催することを義務づける等）ほうが、住民の方々との齟齬は生じないのではないか。
- ・討論会でも「この事業は何をしたいのか」という話が出たが、事業についてきちんと理解しないまま臨んでしまっている学生や住民が多い。集落と大学生に任せるだけでなく、県のほうでももう少しイニシアチブをとってもよいのではないか。
- ・大学と地域双方の事前調査をもっと行った上でのマッチングを行ったほうがよいのではないか。
- ・事業開始時に地域の要望をもうちょっと出してもらったほうが、齟齬が生じないのではないか。

おわりに

我々は大学院生活の2年間、山舟生地区に関わらせていただきました。活動の中では多くの方と出会い、たくさんの方を教えていただきました。

そして2年目の実証実験においては、太鼓を教えていただいたことや山車を担ぎ歩くことなど、普段できないことを経験させていただきました。2年目から参加した学生に対しても山舟生地区の皆さまは温かく迎えていただき、本当に楽しい時間を過ごすことができました。1年目以上に多くの方々に出会い、お酒を酌み交わしながらお話をし、楽しい時間を過ごすことができました。お話を伺う中で、山舟生の皆さまが、「地域の伝統を守っていききたい」「地域をなんとか存続させていききたい」というなお話をされていたことがとても印象に残っています。山舟生の自然・郷土料理・そして何よりも住民の方々の「笑顔」に触れることができるという大変素敵な2年間を過ごさせていただきました。

また、2年間福島事業に関わらせていただく中で、集落の方々だけでなく、大学生同士の交流も生まれるようになりました。同世代の方々との交流はとても良い刺激を受けました。これから我々は社会人となり、これまでのように学生という単位で活動することが困難となってしまいます。どのように地域と関わっていくかについて、これからも考えていきたいと思っております。集落活性化というテーマをいつも頭の片隅に置いて、勉学に励み、また社会生活を送っていきたくと考えております。報告書作成に際しましてご協力いただきました、多くの方々に感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震で被災された皆様、ご家族の皆様に謹んでお見舞い申し上げます。

福島ならびに東北・日本の1日も早い復旧・復興をお祈り申し上げます。

2011年3月
東北大学公共政策大学院α一同